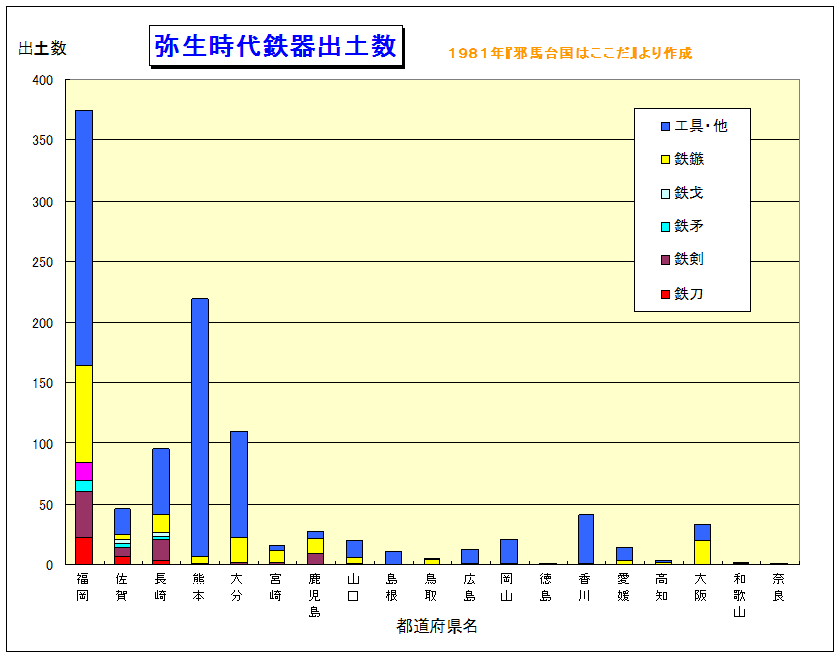
Asia-Japan-Mirrors

http://www.okunomasao.com/zusetu.html

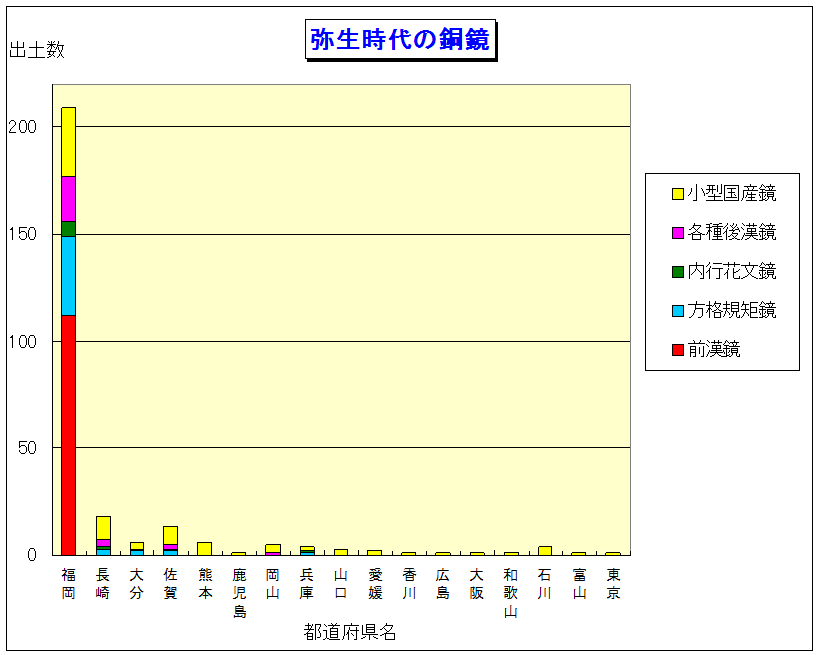
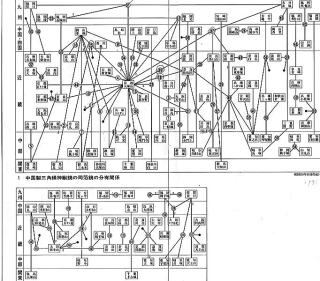
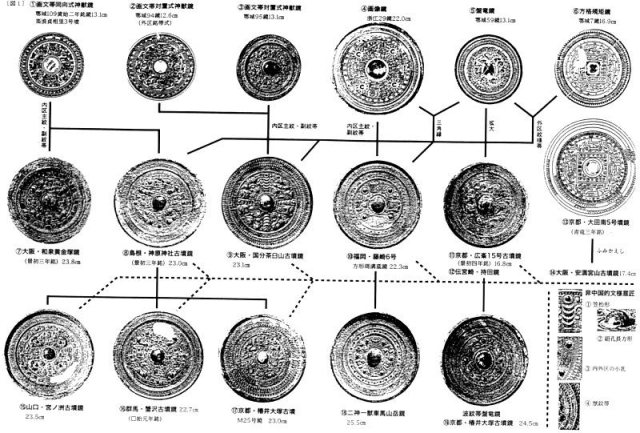
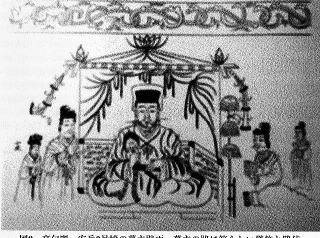
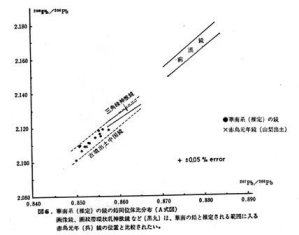
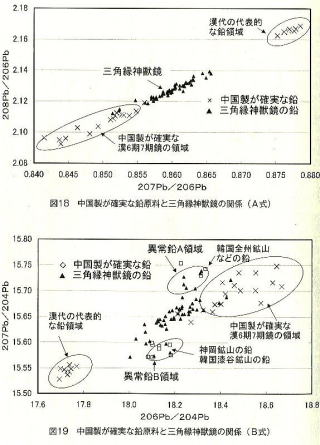
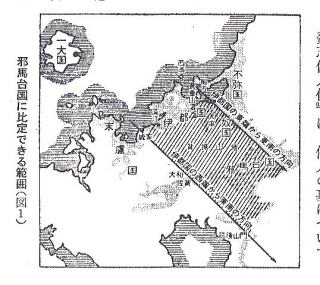
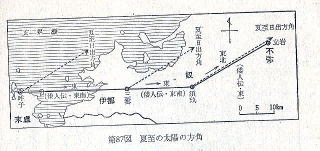
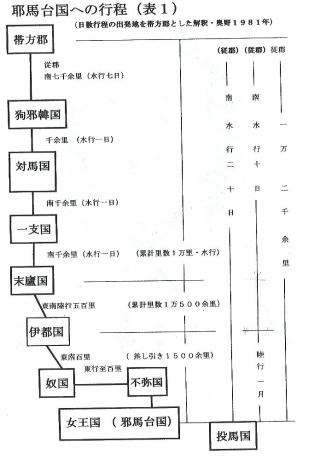
図説・邪馬台国論争私記―**「水行十日・陸行一月」の起点―　奥野正男**  
  
（『季刊 邪馬台国』がついに１００号を迎えました。創刊時から寄稿し**、**つたない史論を世に問いつつ、自分の史観を構築してきた私にとって、同誌１００号・四半世紀の歴史は、私自身の歴史と二重写しになっております。本稿は、私自身の邪馬台国論にかかわった、きわめて私的な邪馬台国論争史です。）（赤字は校正中の字句）  
  
**一、　平原遺跡は卑弥呼の墓**  
私は雑誌『季刊・邪馬台国』2号（一九七九年十月）に｢卑弥呼の鏡は後漢鏡､その墓は平原である｣ ①、同誌５号（一九八〇年七月）に｢邪馬台国九州論－鉄と鏡による論証－｣ ②という二つの史論を発表し、同誌を舞台にしておそまきながら、邪馬台国論争に参入しました。わたくし、４８歳のことでした。  
  
拙論の動機を考えてみると、当時、私は、弥生時代の鏡や鉄器、王墓などには、考古学者のさまざまな異論や解釈が絡んで、邪馬台国論争を縺れきった糸だまの ようにしている。それを正すには、考古学上のたしかな事実を、まず（学者にではなく）邪馬台国フアンに知らせることが大事だ、と考えていました。  
たとえば７０年代の考古学界は、まだ、「平原の大鏡は古墳時代の仿製鏡(ぼうせいきょう)」（注１）という見解が主流でした。九州の考古学界には“畿内型 古墳”という新解釈がもちこまれ、地方の古墳を“外様大名(とざまだいみょう)”などと呼ぶ大学の先生もいました。またそれにおもねって「平原は田舎大名の墓だ」という研究者もいました。古墳を大名(だいみょう)になぞらえて、中央の大名は前方後円墳に三角縁神獣鏡、田舎大名は古い方形周溝墓に流行おくれの漢式鏡という意味のようでした。原田大六氏が私によこした、歯噛みするような怒りの手紙が、私の手元にあります。  
また当時は、高地性集落の性格が大問題になっていました。九州北部から瀬戸内海をへて大和周辺にまで存 在する高地性集落が、女王国の出現に先だつ「倭国大乱」の軍事的防衛機能をもつという論議がさかんでした。畿内説の考古学者は、その西日本を席巻した戦闘 の武器について、弥生時代の黒曜石(こくようせき)製の鏃(やじり)の切れ味のよさとか、高地性集落から出る石鏃(せきぞく)の大型化を強調していまし た。『魏志倭人伝』には五尺刀と鉄鏃がでてくるし、九州では弥生中期の中ごろには鉄鏃、鉄戈(てつか)が現れていますし、後期後半には大形武器の鉄刀や鉄 剣があわせて５０本を超えることは、すこし考古学をかじった人なら誰でも知って事実です。しかし高地性集落と武器に関する論議で、九州の鉄製武器をとりあ げる人は一人もいませんでした。考古学にたいして、なにかヘンだな、という思いが、いつも胸のうちにあったのです。  
当時の考古学界は、日本考古学協会の会長だった大塚初重氏が、福岡市で開かれた邪馬台国シンポジユウムに来て「考古学者で、邪馬台国九州説を信じる人は、おそらく一人もいないでしょう」と豪語するような状況だったのです。それだけならば、まあ、是非は論じませんが、当時の九州考古学界では、若手の研究者が、近畿論者に迎合するように「いま、九州の考古学者で、邪馬台国九州説をとっている人は、一人もいないでしょう」などと応じるわけです。これは、いまも変わりませんが。　  
  
論考①は、三角縁神獣鏡を卑弥呼の「銅鏡百枚」（魏鏡）とする小林説（注２）にたいし、卑弥呼の鏡は後漢鏡としたものです。また、弥生後期の日本一の大鏡 や多数の後漢（式）鏡群をもつ平原王墓を、天照大御神(あまてらすおおみかみ)という「神様の墓」にした原田説（注３）にたいし、平原遺跡は「神様の墓」 ではなく「人間の墓」だという、当たり前のことを書きました。  
論考②は、まず弥生時代の鉄器の出土数を発掘調査報告書にもとづいて全国規模であきらかにし、当時まだなかった「弥生時代鉄器出土地名表」（表１）をつくりました。  
  


**弥生時代の鉄器・都道府県別出土数**（１９８１年）

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 都道府県名 | 鉄刀 | 鉄剣 | 鉄矛 | 鉄戈 | 鉄鏃 | 工具・他 | 合計 |
| 福岡 | 22 | 38 | 9 | 15 | 80 | 211 | 375 |
| 佐賀 | 7 | 7 | 4 | 2 | 4 | 22 | 46 |
| 長崎 | 3 | 17 | 3 | 3 | 15 | 54 | 95 |
| 熊本 | 0 | 1 | 0 | 0 | 6 | 212 | 219 |
| 大分 | 0 | 2 | 0 | 0 | 20 | 88 | 110 |
| 宮崎 | 0 | 2 | 0 | 0 | 10 | 4 | 16 |
| 鹿児島 | 0 | 9 | 0 | 0 | 12 | 6 | 27 |
| 山口 | 1 | 0 | 0 | 0 | 5 | 13 | 19 |
| 島根 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 11 | 11 |
| 鳥取 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 1 | 5 |
| 広島 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 12 | 13 |
| 岡山 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 19 | 20 |
| 徳島 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 香川 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 40 | 41 |
| 愛媛 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 11 | 14 |
| 高知 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 3 |
| 大阪 | 0 | 0 | 0 | 0 | 19 | 14 | 33 |
| 和歌山 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 奈良 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| 合計 | 34 | 78 | 16 | 20 | 182 | 721 | 1051 |

弥生時代の中国鏡や鉄器が九州北部に集中して出土し、近畿地方、とりわけ奈良県などは皆無にちかいという事実は、（考古学者は知っているが）たぶん 邪馬台国フアンの目には初めてふれたことだと思います。鉄器の分布（普及）という、一見、なんでもない事柄に、いったいどんな異論や「解釈の違い」がある のでしょうか。それは、このあとふれる拙論①にたする考古学者・佐原真氏の批判「古銅鉄の回収説」や「副葬習慣の有無」説によく現れています。  
佐原真氏は、「弥生時代の銅器や鉄器は、近畿地方にも、九州地方と同じようにたくさんあった。しかし、近畿地方では、古い銅・鉄は廃品回収して再生利用し たので、遺跡に残らなかった。また近畿の弥生墓に鏡や鉄器がないのは（物がないのではなく）副葬の習慣がなかったためだ」と主張したのです。（第三節、 「果てしなき論争の始まり」）。  
論考②では、さらに、弥生時代の銅鏡の出土地名表（表２）をつくりました。この表には小林説で「近畿地方にも輸入されていた」と仮定した「弥生中期の中国 鏡（伝世鏡）」は数に入れていません。この表によって、発掘で出土した弥生持代の前漢鏡、後漢鏡、小形国産鏡が、鉄器の出土と同じように、九州北部（とく に福岡に）集中して出土し、奈良県などはやっぱり皆無にひとしい事実をあきらかにしました。そして近畿説の考古学者が卑弥呼の「銅鏡百枚」にあてる三角縁 神獣鏡は、弥生時代の遺跡からは一枚も出土しない鏡で、ほんとうは古墳時代の鏡だという事実を、まず邪馬台国フアンにはっきりと示したかったのです。  
小林氏の伝世鏡論は、近畿地方に存在しない弥生中期の中国鏡を、考古学的な「手ずれ」などという感覚的認識 を用いて、あたかも考古学的事実として存在したかのように想定するもので、科学的な認識論としては否定されるものでしょう。しかし以後、世紀末にいたる ３０年の間、小林氏の「同笵鏡の分有関係」論は、日本の考古学界で、他の追随を許さぬ邪馬台国近畿説の主柱となってきました。(注２の一部をここに移動し た)

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 弥生時代の銅鏡 |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |
| 県名 | 前漢鏡 | 方格規矩鏡 | 内行花文鏡 | 各種後漢鏡 | 小型国産鏡 | 合計 |
| 福岡 | 112 | 37 | 7 | 21 | 32 | 209 |
| 長崎 |  | 3 | 1 | 3 | 11 | 18 |
| 大分 |  | 2 | 1 |  | 3 | 6 |
| 佐賀 |  | 2 | 1 | 2 | 8 | 13 |
| 熊本 |  |  |  |  | 6 | 6 |
| 鹿児島 |  |  |  |  | 1 | 1 |
| 岡山 |  |  |  | 1 | 4 | 5 |
| 兵庫 |  | 1 | 1 |  | 2 | 4 |
| 山口 |  |  |  |  | 3 | 3 |
| 愛媛 |  |  |  |  | 2 | 2 |
| 香川 |  |  |  |  | 1 | 1 |
| 広島 |  |  |  |  | 1 | 1 |
| 大阪 |  |  |  |  | 1 | 1 |
| 和歌山 |  |  |  |  | 1 | 1 |
| 石川 |  |  |  |  | 4 | 4 |
| 富山 |  |  |  |  | 1 | 1 |
| 東京 |  |  |  |  | 1 | 1 |
| 合計 | 112 | 45 | 11 | 27 | 82 | 277 |

  
  
まず表１、表２をみてください。弥生時代の鉄器と銅鏡（80年代初頭の数字）は、その大部分が九州北部から出ています。弥生時代の鉄器は、出土数が増え、総数をコンピューターで把握できる現在でも、その傾向はかわりません。  
また前漢鏡の大部分が、魏志のいう伊都国と奴国の領域から出ていることも、卑弥呼以前の政治関係や、日本の国家起源をかんがえる重要な問題を秘めていると、私は考えてきました。  
『古事記』の天孫降臨の伝承に、天照大御神は、天孫・ニニギの命(みこと)に、勾玉・鏡・草薙剣(くさなぎのつるぎ)を賜り、「この鏡は、専(もっぱ)ら わが御魂(みたま)として拝(いつ)き奉(まつ)れ」と詔(の)り、「竺紫(つくし)の日向(ひむか)の高千穂(たかちほ)の久士布流多気(くじふるた け)」に天降り、「此地は韓国(からくに)に向かい、笠沙(かささ)の御前(みさき)を真来(まぎ)通りて、朝日の直刺(たださ)す国、夕日の日照る国な り。故(かれ)、此処は甚(いと)吉(よ)き地(ところ)」と伝えています。この天孫降臨の伝承は、歴史的な事実ではなく、あくまで民俗学的な伝承として 理解することが大切です。私は歴史と神話伝承を考えるとき、いつも森鴎外の「かのやうに」など、大逆事件が起きた明治末年に書いた一連の小説（注４）に 戻って自分の頭を整理することにしています。  
神は墓を作らないのです。墓は、霊魂の永遠の平安をねがう人間の他界観がつくりだしたものでしょう。太陽信仰の起源地を弥生時代の王墓に鏡をたくさん副葬 する糸島地方とみて、平原の被葬者を玉依姫＝天照大神（太陽神の妻・大日靈(おおひるめ)とみた原田説は、民俗学の文脈から問題なく理解できると思いま す。神話が歴史ではないという認識は、明治憲法で敗戦をむかえた一日本人として、私が掲げる一つのささやかな旗でした。  
九州では、90年代に発見された吉野ヶ里遺跡でも、中国・魏朝で行われた冬至・夏至の日に祖霊をまつる祭祀が、北内郭で発見されています。私は吉野ヶ里遺 跡を「女王の都する所」とし、その北内郭の冬至・夏至の祭祀は卑弥呼がとりおこなったものだと考えています。その考古・文献・民俗学的な根拠は（五、魏志 倭人伝の新しい読み方）で書きます。  
  
注１：岡崎敬「三雲・井原・平原の年代」『古代の日本』３九州（角川書店１９７０年）「三雲と井原はあきらかに弥生式の 甕棺である。三雲は、筑紫郡春日町の須玖岡本遺跡、飯塚市の立岩遺跡で発見の甕棺と銅鏡と対比できる。甕棺は弥生中期（須玖式）,鏡は前漢鏡を主体にして いる。井原は唐津市桜馬場と同じく、甕棺は弥生後期初頭であり、方格規矩四神鏡を主体とする。この時期は、壱岐原の辻上層と同時期で、中広銅矛・巴形銅 器・銅釧が作られる。方格規矩四神鏡は王莽代と後漢代初期のものであり、『後漢書』光武帝の中元二年（五七）の倭の奴国の朝貢の時期か、安帝の永初元年 （一〇七）の倭国王・師升が生口一六〇人を献じた時期に、多量の方格規矩四神鏡が日本に贈られたことにあろう。長宜子孫内行花紋鏡は現在のところ甕棺墓か らの発見例がない。田川郡香原町宮原の箱式石棺では、舶載のこの式の内行花紋鏡と?製（国産）の小型内行花紋鏡が出ている。現在のところ、弥生時代の仿製 鏡には平原のような大形の内行花紋鏡は一面も発見されておらず、また、平原の土壙墓は、いまのところ弥生時代のものである確証がない。古墳時代前期に畿内 では大形の小林氏の伝世鏡論は、近畿地方に存在しない弥生中期の中国鏡を、考古学的な「手ずれ」などという感覚的認識を用いて、あたかも考古学的事実とし て存在したかのように想定するもので、科学的な認識論としては否定されるものでしょう。しかし以後、世紀末にいたる３０年の間、小林氏の「同笵鏡の分有関 係」論は、日本の考古学界で、他の追随を許さぬ邪馬台国近畿説の主柱となってきました。仿製鏡が鋳造されており、その点今後の検討をまつべきであろ う。（要約奥野）　」  
  
注２：小林行雄「三角縁神獣鏡の研究」『京都大学文学部紀要・第十三』（昭和四十六年九月）に、「中国製三角縁神獣鏡の 同笵鏡の分有関係」（図３）が掲載された。同笵鏡の分有関係とは、京都の椿井大塚山古墳出土の三角縁神獣鏡と同じ鋳型でつくられた鏡（同笵鏡）を出す各地 の古墳を放射状に線で結んだもの。この論文の「同笵鏡目録」は５０種・２２７面の同笵鏡(中国製三角縁神獣鏡１６９面、仿製(ほうせい)三角縁神獣鏡５８ 面)を記載している。当時、既知の三角縁神獣鏡の数は３７５面に達していた(奥野正男『邪馬台国の鏡』１９８２年)。  
小林氏は椿井大塚山古墳の被葬者を「銅鏡百枚」を各地に分与した当事者と仮定し、「鏡が輸入された時期は、邪馬台国の卑弥呼の景初三年（二三九）における 魏への遣使の直後であろうと考え、かりにこれらの鏡は、二五〇年ごろにはすでに輸入されて、」「四世紀後葉には古墳への副葬が終了した」と仮定してい る。（小林行雄「同笵鏡考」『古墳時代の研究』１９７８年）  
さらに小林氏は、鏡の「伝世鏡論」という仮説をたてた。  
「ⅰ　弥生中期の中国鏡は、九州北部にも、近畿地方にも輸入されていた。  
　ⅱ　九州北部では鏡を墓に副葬した。  
　ⅲ　近畿地方では副葬の習慣がなく、鏡は家宝のように世々伝世された  
　ⅳ漢中期の鏡は３００年ちかく伝世したので、使用のために「手ずれ」の跡が残っている。  
　ⅴ　近畿地方にヤマト政権が成立し、古墳が作られる頃は、私有財産や地位の世襲がすすむなかで伝世の意義がうすれ、鏡はやがて古墳に副葬されるに至った。」（要約奥野）  
  
  
図１　　中国製三角縁神獣鏡の同笵鏡の分有関係（小林行雄）  
  
  
注３：原田大六『実在した神話』（学生社　昭和４１年刊）。原田氏は、小林説を批判し、弥生時代から古墳時代への王墓の 変遷のなかで、九州の平原遺跡で成立した鏡・刀剣・玉（三種の神器）の副葬をはじめ、王墓の内・外部構造や占地などが近畿地方の古墳に継承されていく事実 を重視している。  
原田氏は、結論として「平原弥生古墳の被葬者の子孫たちが、近畿地方に移って古墳文化をさらに発展させていった」と書いている。  
原田氏はこの著書の「むすび」で、平原遺跡に葬られた人物についてのべ、「高祖山の西麓に鎮座する高祖神社が古くは高磯比咩(たかそひめ)社といい、怡土 郡の惣社とされていたということは、わたしの、最後まで残してきた謎であった」といい、高祖神社の祭神に目を向けている。中座がヒコホホデミノミコト、左 座に玉依姫。ヒコホホデミノミコトは玉依姫の子供で、神武天皇の別名である。原田氏は、この高祖神社の祭神の配置から高磯比咩(たかそひめ)の謎を解いた ようである。  
「玉依姫は、平原弥生古墳に葬られた人物であり、生前・死後ともに天照大御神とあがめられた一大女王であった。怡土郡の惣社に玉依姫が祭られたのは、伊都 国が大和政権を樹立する以前の、国都であったからである。大和朝廷が伊勢神宮に天照大御神を祭って皇祖神とあがめたのと同等の意義をになっていた。だが、 神武東征によって、日本列島を征服した大和朝廷にとって、皇祖神は二つは必要でなかった。天に二日(にじつ)はないのである。伊都国の神は歴史とともに、 いつしか大和朝廷の意識から遠ざかり、『古事記』や『日本書紀』が書きとめられるころには、もはや大和朝廷の本籍は、どこであるのか、その詳細はわからな くなってしまっていた。」  
  
注４：森鴎外の明治45年の作品「「かのやうに」「吃逆(きつぎゃく)（しゃっくり）「藤棚」など五条秀麿を主人公とし た作品にそれがあらわれています。これは秀麿という洋行帰りの成年学徒の眼を通じて我国の文明を批評した小説で、秀麿の思想は大体鴎外のそれと思われま す。  
秀麿は、ベルリンで歴史を研究してきて、当時の我国で公定されていた国史が歴史でなく、それを公然と主張することが、父親をはじめ周囲と不愉快な摩擦をひ きおこすことを知って、無為を強いられています。彼はその矛盾を解決せるために、「かのやうに」の哲学に共鳴したりしますが、同時に、この神話を支えとし なくてはならぬ天皇制の秩序の内面的脆弱性を感じずにはいられないし、またその秩序の中に疑問なく生活し、その代弁者を自任する人々の、内生活の空虚、道 徳的劣弱性も、彼を苛立たせます。やはり秀麿もののひとつである「槌一下(つちいっか)」（大正二年）、おそらく作者の実見をそのまま綴った「天寵(てん ちょう)」（四年）などには当時の日本でわずかに見出すことのできた肯定的人間の型が描かれていますが、これらの例外はもとより、彼を満足させるものでは ありませんでした。」（中村光夫『現代日本文学史―明治』筑摩書房）。  
  
**二、　卑弥呼の鏡はどんな鏡か**ⅰ　卑弥呼の鏡は後漢式鏡  
　　卑弥呼の鏡の究明には、まず第一に、邪馬台国の使が魏に派遣された当時、魏都・洛陽にどんな鏡があったかを明かにすることが必要です。次にそれらの 魏･晋鏡が三世紀代の倭国のどの地域から出土しているかを明かにすることが、考古学的な方法で鏡の移動をおさえていく手順であろうとおもいます。  
　　魏代の銅鏡の様式には、後漢以来の鏡式である方格規矩鏡、内行花文鏡、獣首鏡、獣帯鏡、盤竜鏡、キ鳳鏡、双頭竜鳳文鏡、位至三公鏡、画文帯神獣鏡、画 像鏡などがあります。各種の鏡は後漢末から簡略化の傾向を強めながら魏代に継続的に製作されました。しかし､北方の黄河流域では西晋末年から戦乱が続き、 銅鏡生産は停滞しました。南方の東晋、南朝前期（４世紀前半）には、安定した社会状況を迎え、銅鏡の生産が活発でした。その銅鏡の様式は、三世紀代の呉か ら東晋、南朝前期まで､画文帯神獣鏡や画像鏡が流行、とくに画文帯神獣鏡は対置式と環状乳式が多く作られています。（王士林編『浙江出土銅鏡選集』 1979年）  
　　中国鏡が倭国に搬入される概況は､まず弥生時代前期末の多鈕細文鏡、楽浪郡の成立（前108年）を契機に、九州北部の弥生中期の甕棺には前漢鏡が副葬 されています。その後、弥生後期から終末には、墓制が変化し箱式石棺墓、土壙墓、木棺墓などに、後漢式鏡(魏晋鏡)が副葬されました。平原方形周溝墓(割 竹式木棺））などでは多数の後漢式鏡を副葬しています。平原では大形国産鏡（直径４６．５ｃｍ）５面が後漢式の内行花文鏡をモデルに作られました。平原の 大形国産鏡は､その後の古墳時代の国産鏡製作のモデルになりました｡  
　　九州北部の弥生後期～終末の墳墓には、80年代初めに、後漢式鏡(魏晋鏡）の副葬例が85面に達しています。  
その鏡種は方格規矩鏡、内行花文鏡、獣首鏡、獣帯鏡、盤竜鏡、キ鳳鏡、双頭竜文鏡、位至三公鏡、画文帯神獣鏡、画像鏡などで､魏･晋鏡が九州北部に入って いることが確認できます。またこのほかに九州では弥生後期～終末の墳墓と遺跡から後漢式鏡の破片が９３面分も出土しています。（『弥生古鏡を掘るー北九州 の国々と文化ー』北九州市立考古博物館　１９９１年）。  
　以上のように弥生時代後期から終末期までに九州北部に搬入されたことが確認できる後漢式鏡（魏晋鏡）こそ、卑弥呼の鏡である可能性がつよいと言えます。  
弥生時代の終末期に、九州北部に100面をこえる魏晋鏡が出土しているという事実は、今後、古墳から出土する三角縁神獸鏡が増大するなかでいっそう重要な意味をもってくることになるでしょう 。  
  
ⅱ三角縁神獣鏡の謎を解く  
論考②が『季刊邪馬台国』創刊記念に入選した年の８月、「三角縁神獣鏡の研究―その祖形と系譜論を中心に―」という三角縁神獣鏡の笠松形紋様を研究した論考③で、新人物往来社の第６回郷土史研究賞をもらいました。  
また、翌１９８１年にはこの鉄と鏡の研究をもとに、初めて邪馬台国の所在地を論じた『邪馬台国はここだ』④(毎日新聞社)を出版、また論考③をもとに既知 の三角縁神獣鏡（３７５面）を形式分類し、その祖形と系譜をあきらかにした『邪馬台国の鏡―三角縁神獣鏡の謎を解く―』⑤(新人物往来社)の二冊を刊行し ました。  
著書⑤の内容は、三角縁神獣鏡の祖形と系譜を形式学的に研究し、この鏡の文様、意匠、形態の起源と変遷がわかる系統図（図２、図６）を作りました。  
  
図２　同行式神獣鏡の祖形と系譜し  
  
  
図６　日本出土の魏晋鏡・後漢式鏡の祖形と系譜  
  
  
以下、この系統図の概要を説明します。  
三角縁神獣鏡には、モデルにした中国鏡（上段）から取り込んだ各種の中国系紋様・意匠（平縁画紋帯・内区主紋・三角縁・鋸歯紋・方格規矩紋・十二支）があ ります。いっぽう、中国鏡にはない各種の非中国系紋様・意匠（図６下段右・笠松形紋様・長方形の鈕孔・内外区の小乳・獣紋帯）があります。また、三角縁神 獣鏡の内区のモデルになった後漢・三国時代の画紋帯同向式神獣鏡類（図６‐①鏡）は、直径が１２～３ｃｍと比較的に小さい中国鏡です。いっぽう、①鏡の内 区を取り込んだ⑦大阪・和泉黄金塚鏡（中段・景初三年銘・平縁画紋帯同向式神獣鏡）は直径が二倍ちかい大形鏡に作られています。  
次に中段、⑦大阪・和泉黄金塚鏡の内区主紋と景初三年銘をとりこんだ⑧島根・神原神社古墳鏡は、上段の中国④画像鏡・⑤盤龍鏡系の三角縁を取りこむ一方、非中国系紋様・意匠の長方形の鈕孔を取り入れています。  
下段の⑮山口・宮の洲古墳鏡、⑯群馬・蟹沢古墳鏡、⑰京都・椿井大塚山古墳鏡の三枚は、中段⑧・神原神社古墳鏡の外区三角縁・内区主紋を取りこむ一方、非中国系紋様・意匠の長方形の鈕孔・笠松形紋様を取り入れています。  
また、これらの三角縁神獣鏡には、複数の同型鏡（注５）が存在し、中には九面をかぞえるものもあります。  
  
（注５）同型鏡とは、以前、小林氏が「同笵鏡」としていたもので、一つの粘土鋳型を何度も使えないことが判ってから、樋 口隆康氏が同じ原型を複数回使用したり、同型の製品（鏡）を順次原型にして新しい鋳型を作る「踏み返し」鏡をも同型鏡とした。現在は、三角縁神獣鏡を魏鏡 とする論者でも、鋳型は「同型鏡」とする考えが多い。  
  
**三、手人(**てびと**)韓鍛(**からかぬち**)・卓素(**たくそ**)と川邊里戸籍の宅蘇(**たくそ**)吉士(**きし**)**  
70年代初め頃、私は福岡市の古代製鉄の研究家・大場憲郎氏に師事して、福岡市西区の元岡地区や今宿地区にある製鉄遺跡の金糞(かなぐそ)（鉄滓)を集め る手伝いをしながら、古代史の勉強をしていました。大場氏は、たたら研究会の創立時からの会員で、中国河南省の漢代の製鉄遺跡『鞏県(きょうけん)鉄生 溝』（たたら書房）を翻訳・出版し、福岡の古代製鉄研究の道をつけた方です。  
大場氏は、元岡や大原(おおばる)の鉄滓がでる場所に私を連れて行き、「ここには製鉄炉が何基もある。生産が途切れぬように、ローテーションを組んでおったごとある」と、いま考えれば地下の炉跡を見通したようなことを言っていました。  
また、大原(おおばる)海岸に近いカナクソ池の鉄滓出土地で「大原の砂鉄はチタンがゼロに近い。弥生時代の砂鉄精錬炉が必ず博多湾岸にあるはず」と弥生時代の砂鉄精錬の持論を語っていました。  
私の論考②には、「邪馬台国の金属生産」という一章があって、「日本の古代製鉄が、朝鮮南部と中国･江南地方の影響をうけながら、砂鉄を原料にして九州北部で開始された」と想定し、弥生時代の鉄器出土地と伊都国・奴国・邪馬台国の推定地をかさねています（図７）。  
  
図７　九州北部の弥生後期の鉄器出土地と邪馬台国推定地  
  
  
このような推定ができる根拠として、私は論考②に、大場氏が十年がかりで集成した「福岡県製鉄遺跡（鉄滓出土地）地名表」（柳沢一男『広石古墳群』）を使 いました。この地名表には、今では古代製鉄研究者がだれ一人顧みようとしない今宿(いまじゅく)上野原(うえのはる)焼山(やきやま)（スラグ・炉底部残 存・C14－1660±30九大理、1960年）をはじめ福岡・糸島地区の１２０ヵ所の鉄滓出土地をあげました。しかし、たたら研究会を中心にした日本の 古代製鉄研究は、この時期あたりから鉄滓分析の実務が八幡製鉄研究所の分析技師に集まるようになり、その分析結果から、6世紀以前の鉄精錬はないという方 向に落ちついていきました。また、これと重なるように,考古学界には、倭国大乱を鉄器をめぐる争奪戦と想定し、その戦いの勝利の結果、「弥生後期前半には 関東地方まで鉄器が普及し、石器を駆逐したとする幻想」（寺沢薫『王権誕生』日本の歴史２）が色濃く覆っていました。　  
私が弥生時代の鉄器生産にこだわったのは、博多湾の今山産の石斧生産が、弥生後期初めに生産を中止する一方で、弥生後期には同じ伐採用具の鍛造鉄斧や大形 の鉄製武器(太刀、鉄剣、鉄弋)や鉈鎌・手鎌のような農具までが普及していることです。石斧の製作中止と鉄器の普及という両者の因果関係を、石斧から鉄斧 に転換した伐採用具の革新のあらわれと考えていたのです。そして「大原の砂鉄はチタンが少ない」「チタンの少ない砂鉄を使えば、弥生時代でも製鉄ができ る」という大場先生の持論を聞くうちに、鉄器先進地の福岡では弥生時代に小規模な鉄生産もあったのではないかと、考えるようになっていたのです。  
ある日、先生から「古代史をやるなら、漢文読めなくちゃダメだ。自分で訳してごらん」と『中国冶金簡史』（北京鉄鋼学院編）を渡されました。小さな中日辞 典で、この本を読むのに半年くらいかかりました。その本には今、日本の古代製鉄研究者の「常識」のようになっている炒鋼法(しょうこうほう)（炉の中で鋼 をつくる法）や鉄滓が精錬滓か鍛冶滓かを判定する方法が、鉄滓断面の拡大写真つきで載っており、今の分析屋さんのバイブルになっていることが、後でわかり ました。大場先生は、たぶんそれを読めといったことも、後で気づきました。  
また、ある日、先生は『大宝二年の筑前国志摩郡川邊里戸籍』の手書きの写しを見せ、「竹内理三編の『寧楽遺文』という本で、この戸籍の研究をしたらいい」 といわれました。私は、応神記の手人(てびと)韓鍛(からかぬち)・卓素(たくそ)と、大宝二年の川邊里戸籍に出てくる宅蘇(たくそ)吉士(きし)という 人物を調べました。ソという語(ことば)は古代の朝鮮語で鉄を意味する語で、タクは美称だと、その頃、九大に移った西谷正さんに教わりました。応神記の卓 素(たくそ)と川邊里戸籍の宅蘇(たくそ)吉士(きし)の時代は異なりますが、同族の製鉄技師だと思います。怡土郡大領の宅蘇吉士は、高祖山麓の朝鮮式山 城の土塁に囲まれた高祖(たかす)城（高祖神社の社地）に住み、糸島の加也（伽耶）山をあおぐ製鉄遺跡群で、大原海岸の良質の砂鉄を使って、筑前初の砂鉄 精錬をを成功させた、伽耶系の韓鍛冶（鍛冶(かぬち)・金師(かなじ)）ではないだろうか―私の最初の史論です。 (「韓鍛卓素の系譜」『日本の中の朝鮮文化』２４号、１９７４年) 。  
  
それから三十年ちかく経った平成の初め、すでに大場先生も故人となりましたが、九州大学の移転地が福岡市西区の元岡地区に決まり、そのへん一帯の発掘が始 まりました。そしてそこからながい眠りをやぶって八世紀ごろの製鉄遺跡が現れたのです。元岡遺跡のたたらの谷からは、大場先生が言われたとおり、谷間の斜 面を少し平らに削った敷地に、箱型製鉄炉がなんと２８基も一列に並んで現れました。大場先生が言ったとおりの遺跡が出たのです。これは、まさに古代の一大 製鉄工場群といえる遺跡で、たたら遺跡の多い出雲でもこのような遺跡はまだ見つかっていません。  
また元岡遺跡からは「壬辰年韓鐵□□」という木簡が出土しました。「壬辰年」は７５２年にあたり、まさに宅蘇吉士が生きていた時代なのです。  
木簡「韓鐵□□」の空白に、私はひそかに韓鐵(からかぬち)宅蘇という戸籍の名前を充てて、ひとりで楽しんでいます。  
　１９７９年６月には、この論文②の原型になる「鉄の女王・卑弥呼」（７０枚）を書き、旧友・福本正夫が主宰する『五条古代文化』(１５号・１６号）に発表しました。  
結果だけを言えば、この鉄器出土地名表(表１)と、あとで書く三角縁神獣鏡の系統図(図２、図６)を作るのに、７０年代の大半を費やしたわけです。  
各地の報告書を集め、鉄器出土の地名表を作ることは、発掘が多かった当時の現状では、個人の力では不可能なくらい金と暇(ひま)のかかることでした。  
  
**四、果てしなき論争のはじまり**  
論考②は１９８０年７月、『季刊邪馬台国』５号に発表され、同誌の創刊記念論文の最優秀作に選ばれました。その直後から、考古学者・佐原真さんとの“鉄は 錆びて消えるのか。廃品回収はほんとうにあったのか”などというヘンな論争が始まるわけですが、その前に、私の論文を最優秀作に選んだ安本美典編集長の言 葉（注６）を引用させてもらいます。  
安本編集長の上記の「注文」については、それから後、私が『季刊邪馬台国』や自著で、「魏志倭人伝」との関連で自説を展開しましたので、本文後半の節（六、魏志倭人伝の新しい読み方）で書くことにします。  
  
さて、『季刊邪馬台国』5号が出て間もない８０年9月のある日、一瞬“青天の霹靂(へきれき)”という感じの電話がきました―『朝日新聞』の夕刊で、佐原 真(まこと)さんがあんたの論文を名指しでけなしているぞ―「東アジアの古代文化を考える会」の友人でした。考古学者で、当時、邪馬台国九州説批判の先陣 をきっていたのは田辺昭三氏と佐原氏でした。両氏は、すでに６０年代後半に出た考古学講座に、連名で、邪馬台国九州説や東遷説を「神武東征神話の亡 霊」（注７）ときめつける激烈な批判を書いていたのです。  
邪馬台国の東遷説は、神武東征神話の亡霊なのでしょうか。弥生後期の畿内地方に鉄器がまだあまり普及していないという私の主張は、佐原氏にどう写ったことでしょう。三日後に届いた友人の手紙には、新聞の切り抜きが入っていました。  
  
（注６）「応募作品二三七編中の、ずばぬけた力作は、奥野正男氏の邪馬台国九州論―鉄と鏡による検証―である。邪馬台国 研究の、今後のありかたの一つを示している。鉄と鏡とのデータの示し方は、完全にプロである。今日まで、邪馬国の問題に関連して、鉄と鏡のデータ(特に鉄 についてのデータ)を、これほど充実した形で示した人はいなかった。そのデータの示し方は、まさに圧倒的である。鉄こそは、弥生後期、すなわち、卑弥呼の 時代の遺物として、異論の少ないものである。今後、邪馬台国について論ずるさい、奥野正男氏のこの論文をさけて通ることは、できないであろう。現在の邪馬 台国に関する諸論考の平均的水準をはるかに抜く秀作と考えられる。この作品について、強いて注文をつければ、その豊富なデーターにもとづいた「推論」の部 分である。奥野正男氏は、鏡の問題を検討して平原遺跡を卑弥呼の墓と「想定」しながら、弥生後期の鉄器出土地の分布からは、邪馬台国の位置を筑前南部の朝 倉から鳥栖のあたりにかけて求めておられる。このへんは、いますこし説明の欲しいところである。ふつうに考えれば、卑弥呼の墓は、伊都国にではなく、邪馬 台国にあったと考えられるからである。いずれにせよ、邪馬台国問題についての、新しいスターの誕生をよろこびたい。文章にけれん味がないから、大向こうの 喝采をねらうよりも、あいつぐ力作の発表により、邪馬台国問題の論壇を制圧していくことである。今後の活躍を期待したい。」  
（注７）「われわれは初期大和政権の前史を、中国文献に記載された邪馬台国であるという仮説にたって、われわれの年代観 を述べてきたが、かりにこの仮説があやまりであったとしても、これまで本稿で展開してきた大和政権前史としての畿内弥生時代に関する問題提起や考察は、な んらかわりない。邪馬台国が北九州に存在すると仮定するなら、日本の国家成立について初期大和政権の前史を邪馬台国にあてて書かれている従来の多くの歴史 記述は、畿内弥生時代から初期大和政権への必然的な歴史過程に書きあらためるべきであると考える。そのばあい、邪馬台国はわが国初現の国家形態を考えるば あいの参考としての位置に転落せざるをえないだろう。最近、神武東征神話の亡霊ともおもえる邪馬台国東遷説が一部でとりあげられているが、古墳の出現に先 だつ畿内第五様式の段階に、北九州勢力の東遷を推測させるような、とるにたる考古学的資料はまったくみとめられないのである」（「弥生文化の発展と地域性 ‐近畿‐」『日本の考古学』Ⅲ弥生時代　河出書房新社 １９６６年）  
  
「奥野氏は、弥生時代九州・畿内の鉄器の数（刀で24対0、剣で40対2）を比較し九州の圧倒的優勢を実証する一論拠としており、じつに説得性がある、か にみえる。しかし、ドイツの考古学者ハンス＝エガーズが指摘したように、青銅器・鉄器はこわれたり不要になると地金として回収し、新しい製品に姿をかえる のが普通だ。墓に副葬されたり、銅鐸のように意図的に埋められるなど、特殊な場合に限って姿をとどめることになる。だから弥生時代に副葬の風習があった北 九州と、なかった畿内とを、いま残る鉄器の数でくらべても、弥生時代当時の比較にはならない。（『朝日新聞1980年9月6日付夕刊』）」  
  
なんだこりゃ。地金の回収とか言っているが、要するに実際には存在しないものを、存在したように言いくるめようとしている詭弁だ―私はそう感じました。  
しかし佐原氏は、さらに「彼は、その北九州地方の鉄器の多くが副葬品であることを考慮していない」と続けるのです。近畿地方に鉄器はあったのだが、貴重品を墓に副葬する習慣がなかったので、残ってないのだ―言うのです。  
だがしかし、近畿地方に副葬習慣がなかったというのは、在るものを無いといいくるめる詭弁ではないか。近畿地方にも鏡や鉄剣、管玉、腕輪などを副葬した墓が、まだ当時は少なかったけれども、あるのです。  
論考②の弥生時代の銅鏡（表２）では、８３面の後漢鏡を数えあげましたが、そのなかに兵庫県の二つの墓の鏡と鉄剣の副葬例を書いていたのです。当時、すで に話題になっていた兵庫県・加古川市の西条５２号墳（長宜子孫銘内行花文鏡、鉄剣）、揖保(いぼ)川(かわ)市の養久山(やくやま)弥生墳墓（四獣鏡、鉄 剣）などです。高名な考古学者がこの遺跡を知らないわけがない。また、もっと以前の発掘例では、尼崎市・田能(たの)遺跡の木棺墓では、六百余りの碧玉製 玉や白銅製の腕輪をつけていた例もあったではないか。有名な学者が大新聞でウソを書く。読者が、私を、そんなことも知らないシロウトと思うように、外国の 学者の名前などをだして。私は、深い不信感にとらわれながらも、「九州の墳墓と集落からの鉄器出土数」（奥野正男『邪馬台国紀行』海鳥社）をつくって、九 州の鉄器が副葬品より集落出土のほうが多いことをあげて、佐原氏を反論しようとしていました。  
ところが、佐原真氏は「近畿に鉄器が少ないのは、鉄が腐るからだ」といいだすのです。腐る鉄器の比較はやめて、腐らない青銅器の量で比較しようというので す。またその後、出雲で全国総数をこえる銅鐸や銅剣が出土し、九州・佐賀でも古式銅鐸の鋳型が出たりすると、佐原氏は、近畿の銅鐸職人が鋳型を携えて九州 や出雲地方に行って銅鐸をつくったという、職人の移動説を主張しました。ああいえばこういう、果てしなき論争のはじまりでした。  
  
**五　邪馬台国の鏡―三角縁神獣鏡の謎を解く―**  
**ⅰ祖形と系譜**  
１９８０年８月、「三角縁神獣鏡の研究―その祖形と系譜論―」という鏡の論文が新人物往来社の第６回郷土史研究賞をもらいました。翌１９８１年にはこの鉄 と鏡の資料をもとに『邪馬台国はここだ』③(毎日新聞社)、『邪馬台国の鏡―三角縁神獣鏡の謎を解く―』④(新人物往来社)の二冊を刊行しました。  
著書④の内容は、三角縁神獣鏡の形式学的な研究を通じて、この鏡の文様、意匠、形態の起源と変遷がわかる系統図を作りました。これはすでに第２節の（図２、図６）で説明しましたが、この系統図でもちいた中国的紋様・意匠、非中国的紋様・意匠という、私がつくった概念を説明します。  
三角縁神獣鏡には、モデルにした中国鏡（上段）から取り込んだ各種の中国鏡でもちいられている紋様と意匠（デザイン）があります。平縁画紋帯・内区主紋・ 三角縁・鋸歯紋・方格規矩紋・十二支などがそれです。いっぽう、中国鏡にはない各種の紋様・意匠（デザイン）があります。それを非中国的紋様・意匠といっ ているわけですが、それらに笠松形紋様・長方形の鈕孔・内外区の小乳・獣紋帯などがあります。また、三角縁神獣鏡の内区のモデルになった後漢・三国時代の 画紋帯同向式神獣鏡類（図１‐①鏡）は、直径が１２～３ｃｍと比較的に小さいのです。これにたし、①鏡の内区を取り込んだ⑦大阪・和泉黄金塚鏡（中段・景 初三年銘・平縁画紋帯同向式神獣鏡）は直径が二倍ちかい大形鏡に作られています。つまりデザインとして、中国の同向式神獣鏡は、直径が１２～３ｃｍと小型であるのにたいして、中国鏡の内区のデザインを取り込んだ三角縁同向式神獣鏡は二倍ちかくの直径に大型化しています。つまり大型化も非中国的デザインになるわけです。  
（図６をもう一度みてください）。中段、⑦大阪・和泉黄金塚鏡の内区主紋と景初三年銘をとりこんだ⑧島根・神原神社古墳鏡は、上段の中国④画像鏡・⑤盤龍 鏡系の三角縁を取りこむ一方、非中国系紋様・意匠の長方形の鈕孔を取り入れています。下段の⑮山口・宮の洲古墳鏡⑯群馬・蟹沢古墳鏡⑰京都・椿井大塚山古 墳鏡の三面は、中段⑧・神原神社古墳鏡の外区三角縁・内区主紋を取りこむ一方、非中国系紋様・意匠の長方形の鈕孔・笠松形紋様を取り入れています。  
この系統図でよくもちいる笠松形紋様というの名称は、小林行雄氏が自分の論文で命名された用語であったが、私が最初の論考③を書き上げたあと、投稿する前 に、小林先生に電話し、別な名称を使うと論議が噛み合わなくなるので、どうか先生の鏡の紋様表現（ZT）と笠松形紋様という表現を使わせてほしいとお願い した。頭から断られるかと、緊張しながらの電話でした。そばで、私の電話を聞いていた亡妻が、あとで「あなた声をふるわしていたわ」といったのを覚えてい る。しかし、先生は「いいですよ」といって、ちょっと間をおいてから、「本が出たら送ってください」といわれました。  
  
**図３高句麗・安岳3号墳の墓主壁画**  
墓主の脇に節とみられる儀飾と脇侍が描かれている。この構図が鏡の神像と笠松形のモデルになった。  
  
  
図４　京都府椿井大塚山古墳出土の三角縁神獣鏡  
  
① 左下の笠松形は立像の人物が捧げ持つ  
② 右上の笠松形は座像の人物が捧げ持つ  
神獣のあいだに四個の笠松形を配置  
  
　**ⅱ　笠松形図像と高句麗・安岳３号墳の壁画**　  
　私は八〇年代はじめ、『三国志』・「魏書」・「倭人条」の行程記事や弥生時代の九州北部に中国・朝鮮経由の素環頭鉄刀や銅鏡（後漢式鏡）が集中する考古学的事実をもとに、邪馬台国九州説を主張してきました（本節註１）。  
魏志倭人伝には、魏の明帝から邪馬台国の女王・卑弥呼に「銅鏡百枚」を下賜したと明記されています。考古学界では４～５世紀代の墓（前方後円墳）から大量 に出土する三角縁神獣鏡を「銅鏡百枚」にあてる魏鏡説が主流をしめていましたが、八十年代はじめから筆者は、この鏡が中国から一面も出土しないという森浩 一氏の主張をもとに「銅鏡百枚」を九州北部に出土例が多い後漢式鏡とし、三角縁神獣鏡は古墳時代（４～５世紀）の国産鏡とする説を提起してきました（註 ２）。  
私が三角縁神獣鏡を国産とした独自の根拠は、鏡の背面に鋳出された笠松形図形のデザイン（図４）が、中国出土鏡には見られないことにありました。同時に三 角縁神獣鏡の制作者（鋳鏡工人）の出自や制作年代を考える上でも、神像と笠松形図形のデザインが高句麗の安岳３号墳（冬寿墓・３５７年）の墓主の壁画（図 ３）と酷似していることは、きわめて示唆的な事実でした。また踏みかえされた三角縁神獣鏡の銘文には、原型鏡の銘文語句を独自の中国文で改変を加えたもの があり、制作者を大陸渡来の識字者とする根拠もありました。安岳３号墳の壁画は、墓主の脇に節・幢・幡などにあてられる儀飾類を飾っており、墓主が中国王 朝と服属・冊封(さつぽう)関係をもつ４世紀中葉の遼東・高句麗政権の支配層であることを示しています。  
同向式画紋帯神獣鏡は、楽浪貞柏里３号墳からも出土しており、楽浪・帯方郡系の鏡作り工人が倭国に移住し、三角縁神獣鏡の内区原型をデザインしたと見られます。  
　魏・晋代を通じて中国王朝との冊封関係を維持していた倭国には、帯方郡の滅亡（３１４年）前後に、鏡作り工人が移住した可能性があり、高句麗系の神仙思想の流伝とともに、三角縁神獣鏡の神像と笠松形のデザインを創出したという仮説をたてました。  
  
註１；奥野正男『邪馬台国はここだ』　毎日新聞社　１９８１年  
註２；奥野正男『邪馬台国の鏡－三角縁神獣鏡の謎を解く－』新人物往来社１９８２年  
  
**ⅲ　論争の行方**  
八十年代、小林説の反論として、森浩一氏が提起した①三角縁神獣鏡は中国から一面も出ない②鈕(ちゅう)孔が扁平（長方形）で、鋳造時の中子(なかご)が 詰まって実用性を欠き、副葬専用の「明器(めいき)」にちかい③鈕孔の特徴は朝鮮半島の公孫氏（燕）の領域にみられる―という所説（注８）は、日本の三角 縁神獣鏡研究の新たな展望をしめす画期的な問題提起でしたが、戦前いらいの古鏡の年代観（注９）を固守する考古学・京都学派がそれを受け入れる機運にはあ りませんでした。「しかし、森の投じたこの一石が、まず松本清張に谺(こだま)し、ついで古田武彦や奥野正男ら当時在野の研究者の波紋をよび、やがて中国 考古学界の岸辺を洗って、ついに国際的な波浪が押し寄せてくることになる（岡本健一『邪馬台国論争』講談社選書メチエ、1995年）」というわけです。  
  
　中国考古学界の王論文（注１０）は1981年から1988年の『考古』（中国社会科学院考古研究所編の学術雑誌）に発表され逐次、翻訳されて日本に紹介 されました。王論文①は、前記の森説や私の論著②を追認するもので、それ以後、王氏は精力的に日本でシンポジュウムや講演会に参加して、呉の工人渡来説を 主張することになります。  
これにたいして、日本の考古学界は、小林説を信奉する田中琢氏（奈良文化財研究所文化庁遺跡調査官）、都出(つで)比呂志氏（大阪大学教授）ら日本の考古 学界を代表する人々によって三角縁神獣鏡の特鋳説（田中琢『倭人争乱』集英社版・日本の歴史２、１９９１年）が主張されていきます。三角縁神獣鏡が中国か ら一面も出ないという事実にたいして、卑弥呼に下賜するために特別に鋳造した鏡だから、中国に出ないのだ、という主張です。特鋳したという証拠は？と訊け ば、「中国で一枚も出ないのが特鋳の証拠なのだ」という返事です。  
一種の循環論に堕した考古学界の「特鋳鏡」説を陰から支えていたのは、実は８０年代はじめ、東京国立文化財研究所の馬淵久夫氏らが三角縁神獣鏡や古墳出土の漢式鏡など各種青銅器の鉛同位体比を分析した論文（注１１）ではなかったかと、私は確信しています。  
  
図５－１馬淵論文付図  
  
  
　馬淵論文は、古墳出土の後漢・三国鏡と三角縁神獣鏡鏡はすべて中国製であるという結論を出しています。しかし、不可解なことに、この馬淵論文は、実際に 中国から出土している魏晋鏡は一面も分析しておらず、さらに産地を推定する最も重要な決め手になる鉱山の鉛同位体比では、日本の対州鉱山や神岡鉱山を分析 対象から外しているのです。このような分析方法の手の内は、一般の人には知りようもなく、科学分析の結果、“三角縁神獣鏡鏡はやっぱり中国製”、“中国か ら出ないのはやっぱり特鋳品だから”という結論だけが、以後二十年あまり邪馬台国フアンだけではなく、考古学界や他領域の研究者にも信じられていたのでは ないかと思います。  
  
１９８６年、京都府福知山市の広峰１５号墳から「景初四年」銘の三角縁盤龍鏡が出土しました。魏朝は景初三年で終り、正始元年に改元されています。「景初 四年」は中国史上にない年号です。このニユースに応えるように、兵庫県西宮市の辰馬(たつうま)考古資料館が、「景初四年」銘の三角縁盤龍鏡（伝宮崎県持 田古墳出土）を持っていると発表しました。それより十年ほど前、論考②や著書②を書くために、私は辰馬資料館に手紙を出し「景初四年銘の三角縁盤龍鏡の見 学」をお願いしたことがあります。当時のＭ館長から「そんな鏡は当館にない」というつれない返事を頂いたことが忘れられません。  
実在しない年号鏡がなぜ日本の古墳から出るのでしょうか。三角縁神獣鏡鏡の「特注説」をとっていた都出氏は、この「景初四年」銘鏡にたいし、“年賀状説” なる説を披露しました。翌年、邪馬台国に下賜することが決まっているので、年賀状と同じように翌年の年号を入れたのだ、という主旨を新聞などに書いておら れました。邪馬台国近畿説フアンへのリップサービスか。しかし、これを考古学者の学説といえるのか。中国の王仲殊氏は、日本考古学界の戦前の学説に固執し た特鋳説にたいし、学問的な論説とは考えられない「奇怪な学説」という、厳しい批判をしています。　  
私は、「景初四年」鏡が、魏都の改元を知らない遠隔地の製品であることを、楽浪出土の紀年什器の例をあげて論じました。（注１２）。  
私の特鋳鏡批判は、小林説批判からやがて、次第に日本考古学界の体質批判に移っていきました。中国の学者が参加した国際的な鏡の産地論争で、中国に三角縁 神獣鏡が出ないという考古学的事実すら認められない三角縁神獣鏡の「特注説」とは一体、学問なのだろうか。私は、その後、旧石器捏造問題にも見られた日本 の考古学界に底流する自民族中心主義(えすのせんとりずむ)に批判の目を向けるようになりました。私は小林説を学ぶなかで、三角縁神獣鏡がどのような鏡で あるかを知り、三角縁神獣鏡の非中国的紋様・意匠の存在に気づき、国産説を構築したのです。戦前いらいの「特鋳鏡」説を、外国の考古学者にまで主張する学 界の自民族中心主義は、２１世紀の国際社会には通用しない学会体質です。１９８９年、小林氏は亡くなられましたが、終生、自説を批判する私にも温かい眼を むけておられたように思います。（注1３）  
二十年あまり繰り返された、千日手のような “特鋳鏡論争”の悪循環を破って、２００１年、晴天の霹靂のごとく現れたのが、金属学者・新井宏氏の三角縁神獣鏡の鉛同位体比の分析論文（注１４）です。 この論文は、鏡の産地領域を推定する基本資料である中国の南北、朝鮮、日本の鉛鉱山の鉛同位体比を網羅した分析で、さらに三角縁神獣鏡、古墳出土の漢式鏡 はもとより、中国で出土している真の魏晋鏡の鉛同位体比を網羅した分析論文でした。新井論文によると、中国から出土した真の中国鏡・魏晋鏡は、みな中国の 鉛鉱山の鉛同位体比の領域に属し、三角縁神獣鏡には、おもに神岡鉱山の鉛が析出されていると言います。  
  
　　　図５－２　新井宏論文付図  
  
  
注８：森浩一氏の所説「日本の古代文化―古墳文化の成立と発展の諸問題」『古代史講座』３、１９６２年）森氏は①三角縁神獣鏡は肝心の中国から一面も出な い②鈕(ちゅう)の孔が扁平（長方形）で、鋳造時の中子(なかご)が詰まっていたり、実用性を欠き、副葬専用の「明器(めいき)」にちかい③こうした鈕孔 の特徴は朝鮮半島の公孫氏（燕）の領域にみられる―と指摘。  
  
注９：戦前いらいの古鏡の年代観大正九年、富岡謙蔵（京大講師）が、当時知られていた三角縁神獣鏡の「□始元年」銘に欠 字があるため、年号で魏鏡と判定できない。そこで、他の銘文「銅出徐州、師出洛陽」（大阪府国分茶臼山古墳出土）を取り上げ、「徐州」と「洛陽」の地名が 同時に存在した時期を地名の変遷史料から特定し、三角縁神獣鏡が魏鏡であることを論じた。（富岡謙蔵『古鏡の研究』１９２０年）  
  
注１０：中国考古学界の王論文①王仲殊「日本の三角縁神獣鏡の諸問題」1982年、⑩「日本出土の景初四年銘の三角縁盤龍鏡について」1987年、など13篇、王仲殊『三角縁神獣鏡』学生社、1992年）  
  
注１１：馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究（二）―西日本出土の鏡を中心にして―MUSEUM382号1983年  
この論文には前漢鏡、弥生時代の細型銅剣、銅鐸、小型?製鏡、三角縁神獣鏡、古墳出土中国鏡の鉛同位体比が図示されています。また馬淵氏らが独自に作った 華北、華南、日本、朝鮮半島など鉛鉱山のある４地区の領域図に、前記の同位体比を分析した遺物を図示し、前漢鏡や弥生時代の銅鐸や?製鏡が華北の鉛の領域 に、古墳出土の後漢・三国鏡と三角縁神獣鏡鏡が華南の鉛の領域に、細型銅剣や前期の銅鐸などが朝鮮半島の鉛の領域に、それぞれ整然と入ることが図示されて います。つまり、鉛同位体比の分析によると、古墳出土の後漢・三国鏡と三角縁神獣鏡鏡が中国製であることが図示されています。  
図５－１　馬淵・平尾論文付図  
  
  
注１２：奥野正男｢景初四年は存在したか－国産鏡の有力資料－｣ 『東アジアの古代文化』51号 1987年）漢代、朝鮮半島の北西部にあった楽浪漢墓には、改元後の歴史上に存在しない年号を書いた什器が出土しています。（『楽浪漢墓第２冊、』）。  
盤龍鏡の国産過程は、国産鏡の中国系紋様・意匠と非中国系紋様・意匠を系統図にした私の図６をみてください。この鏡の中国系紋様・意匠は、⑤中国製小型盤 龍鏡を祖形にして、⑪広峰１５号古墳鏡と⑫伝宮崎持田鏡に拡大され、同時に非中国系紋様・意匠の②鈕孔長方形を取り入れ、さらに非中国系紋様・意匠の①笠 松形を取り入れて⑲京都・椿井大塚山鏡・波紋帯盤龍鏡（24.5ｃｍ）へと大型化していくのです。  
  
注1３：穴沢和光「小林行雄博士の軌跡」「あるとき小林は馬目(まのめ)（順一）にむかって、「三角縁神獣鏡問題に関して、私を批判したすべての書物や論 文のうちで、もっとも良く勉強して書いているのは奥野正男氏の『三角縁神獣鏡の謎』である。しかし、惜しむらく奥野氏は正規の学問の方法を学んでいないの で、自分の思い込みを訂正できないまま、あらぬ方向に突き進んで行くのが恐ろしい」と語ったといわれる。」（角田文衛編『考古学京都学派』1994年）  
  
注１４：新井宏論文  
①「鉛同位体比による青銅器の鉛産地推定をめぐって」『考古学雑誌』八十五巻二号（二〇〇〇）  
②「三角縁神獣鏡・和屋博の分析方法は重大な誤り」『季刊邪馬台国』八十七号（二〇〇〇五・四）  
③「鉛同位体比からみた三角縁神獣鏡の製作地」『情報考古学』十一巻一号（二〇〇五）  
④「鉛同位体比からみて三角縁神獣鏡は非魏鏡」『東アジアの古代文化』（二〇〇六・秋）  
⑤新井宏『理系の視点からみた「考古学」の論争点』（大和書房、二〇〇七年）  
  
**六、魏志倭人伝の新しい読み方**  
私の入選論文②によせた安本編集長の「注文」は、次のような内容でした。　　　　　　　　　　　　　  
「奥野正男氏は、鏡の問題を検討して平原遺跡を卑弥呼の墓と「想定」しながら、弥生後期の鉄器出土地の分布からは、邪馬台国の位置を筑前南部の朝倉から鳥栖のあたりにかけて求めておられる。このへんは、いますこし説明の欲しいところである。」  
歴史紀行①「帯方郡使の来た道」（『歴史と人物』昭和５８年８月号）は、氏の「注文」に応えた八十年代初めの作品です。  
帯方郡から邪馬台国への門戸、末盧国や伊都国に着いた帯方郡使一行の旅程を、魏志の「一万二千里」という総旅程から差し引きして、伊都国から女王国までの 足どりを推理したものです。後述する榎説のアレンジ版ですが、戦前の内藤・白鳥論争いらい氷結したような感じの文献解釈にたいする、私の最初の試みでし た。　  
魏志は、帯方郡から女王国までの総里数を「一万二千里」（引用文献注①）としており、帯方郡から末盧国までの里数は、各区間の理数を加算すると、ちょうど「一万里」になります。  
次に末盧国から伊都国までの里数は、魏志に「東南に陸行し五百里で、伊都国に到る」（引用文献注②）とあります。末盧国や伊都国がある唐津～福岡西部の地図（図８）をみてください。  
図８　　　　　　松浦・唐津～糸島・福岡西部地域図  
  
  
末盧国から伊都国への方向は「陸行東南」ですが、その方向で、唐津あたりから東南にすすむと、伊都国には行けず、佐賀の有明海沿岸の方に行ってしまいま す。末盧国（松浦郡）から伊都国への実際の方向は、「東南」ではなく「東」にあたります。魏志の方向はどうも時計まわりに４５度ずれているようなのです。 たとえば、魏志は対馬国（対馬(つしま)）から一大国（壱岐）への方向を「また南に一海を渡ること千余里、名は瀚海と曰う、一大国に至る」（引用文献注 ③）と書いています。しかし対馬と壱岐の位置を地図で見ると、「南」ではなく、やっぱり「東南」にちかく、約４５度ずれているのがわかります。  
７０年代はじめころ、原田大六氏は、この方位のズレにみごとな解釈をくだしました。帯方郡使は夏にやってきて、その航海は、夏の日の出を「東」としていた ので、魏志の記事と実際の地図上の方位とは約４５度の誤差がでる（注８）、というのです。私も１９８１年に書いた自著①『邪馬台国はここだ』で、倭寇や遣 唐使が玄界灘をわたった季節を調べ、帯方郡使が来た季節はやっぱり夏であろうと考え、原田氏の卓抜な方位観に従いました。  
方位論議の結論は、帯方郡使の来た道は、末盧国から伊都国へ、方位は東南ではなく「東」に向かってすすんだ、ということになります。そして魏志は「東南陸 行」としていますが、帯方郡使は末盧国まで船できているわけですから、唐津湾を東行して水行五百里の伊都国に、船で直行したと想定しました。唐津から糸島 に行く海岸には断崖・絶壁が多く、弥生時代のむかし、まだ海岸線をつらぬく道はなかったでしょう。帯方郡から伊都国までの累計里数は一万五〇〇里で、そこ から先、女王国までの里数は、榎説に従って、総里数・一万二千里から伊都国までの累計里数・一万五百里を引き算しました。伊都国から女王国までの里数は千 五百里になります。  
榎説は伊都国を基点にした放射式読法（榎一男『邪馬台国』至文堂１９６６年）で、戦前の白鳥説をひきついで、戦後の邪馬台国九州説の主柱になった学説で す。私が榎説に従ったのは、もうひとつ理由があって、この頃、榎先生を会長に、安本氏を事務局長にした「邪馬台国之会」がつくられ、私はもとめられて顧問 を引き受けていました。晩学の私はまだそのころ『三国志』の原文をやっと読み始めた状態で、それまでは石原道博編訳『魏志倭人伝』（岩波文庫）の訳文で、 お茶をにごしていたのです。  
  
　ところでその頃、邪馬台国論争は、古田武彦『邪馬台国はなかった』（１９７１年）から安本美典『「邪馬壱国」はなかった』（１９８０年）に飛び火し、九 州説同士の激しい対決が前面に出ていました。畿内説は、明治以来の内藤湖南の説（注９）と三角縁神獣鏡の魏鏡説をかかげ、文献史学と考古学のおおかたの賛 同を得て、九州説同士の対決を対岸の火事のように眺めている感じでした。　  
私は、八十年代、伊都国を基点に放射式に「奴国、不弥国、投馬国、邪馬台国のそれぞれに至る」という榎説に従ってきましたが、、ほんとうはまだ自力で「南至邪馬台国、女王之所都、水行十日、陸行一月」の正解を得ていない状態でした。  
九州説の白鳥庫吉は、「陸行一月」を「一日」に訂正し、榎一雄は「水行すれば十日、陸行すれば一月」と解し、その距離を里数の引き算で「１５００里」の筑 後山門説、松本清張は距離や方向は不正確として、位置の比定を避けた九州説でしたが、「以死」を卑弥呼殺害説、、「大率」を魏の派遣官など（『清張通 史』）から大きな啓示をうけました。  
『三国志』や「魏志」を人の訳文ではなく、辞典を引きひき、自分なりの訳をつけてみるなかで、まず最初に気づいたのがこの節のはじめに書いた、伊都国と女王国とが南北の位置にあるという文章でした。  
  
歴史紀行①「帯方郡使の来た道」は、伊都国の南に女王国があるという南北の位置関係に従って、伊都国王墓のある糸島の三雲あたりから、榎説で算出した「千 五百里」を南行すると、邪馬台国に比定できる範囲は、有明海北部沿岸一帯、筑後川北岸一帯になるとしてます。（図７、図８）。ただし伊都国と女王国をむす ぶ南北の方位は、先述した原田説に従い、東に４５度修正することが必要です。  
また、さきに述べた魏の派遣官・大率が、「伊都国を治め、諸国を検察した」という記事は、「世々王有りて、 皆(みな)女王国を統属す。郡使往来し、常に駐(とどまる)る所」（文献注⑤）という伊都国王の前史とあわせて、倭の女王が魏の張政から告喩をうけ、「卑 弥呼よって死す」という正始八年以後の政治状況を読み取るキーワードです。  
「卑弥呼は政治不安定の責任をとらされ、殺された」という松本清張の主張（「清張通史」）を手がかりに、私は  
魏志倭人伝の原文を読み直し、魏志のなかから「以死」の全用例を探して、卑弥呼の死因を考え ました。（注１０）。卑弥呼が帯方郡吏に殺されたという私の考えは、半世紀あまりり反響がありませんでしたが、２００５年（平成１７年）３月、岡本健一氏 の新見解（注１１）「倭の女王卑弥呼の最後―「以死す」再考」が発表され、松本清張や私の説に力強い賛意が示されました。岡本氏は『蓬莱山と扶桑樹』（思 文閣出版、２００８年）でさらに、卑弥呼の最後と昇仙、以死の全用例などの研究を発展させています。  
  
本文注８：　原田大六『邪馬台国論争』１９６９年、３５８ページ） 「太陽の出る場所は、わかりきったことだが夏至と冬至の間では約６０度違う。もし冬の最中に帯方郡使がやってきて、太陽の出る方向を東としたら、実際の東 は東北になる。南は東南になる。夏至近くにやってきたら、東は東南になり、南は南西になる。冬至と夏至では概略の方向は９０度の相違にもなるのである。狗 邪韓国から不弥国までの相違が、実際と約４５度内外南よりに誤差が生じているのは、帯方郡使がやってききたのが夏であって、それに随行して記録をとったも のが、方位を太陽の出る方向にしたので、そこに４５度の差が出たのではないかということが考えられる」  
  
図９　夏至の太陽の方向  
（原田大六『邪馬台国論争』三一書房より）  
  
  
（本文注９）内藤湖南の説：（「卑弥呼考」『芸文』第一年第二～四号、明治４３年）内藤湖南はこの論考で「投馬国より水行十日陸行一月といえる距離も」と 書き、その日数を「王畿の大和」への行程と解釈、その起点を投馬国とした。魏志には「南至邪馬壱国、女王之所都、水行十日、陸行一月」とある。湖南は原文 の「南」という方位を意に介せず「東」に解釈したとみられる。明治以来の内藤湖南の説が、女王国への方位を「南」から「東」に改めた嚆矢であろう。  
  
文献注①「自郡至女王国萬二千余里」  
文献注②「東南陸行五百里、到伊都国」  
文献注③「又南渡一海千余里、名曰瀚海、至一大国」  
文献注④「自女王国以北、特置一大率、検察諸国、諸国畏憚之、常治伊都国」。  
文献注⑤「世有王、皆統属女王国、郡使往来常所駐」  
  
（本文注１０）奥野正男：「告喩」・「以死」・「百余歩」―正始八年条の解釈をめぐって―（『季刊邪馬台国』８号１９８１年４月号）  
（注１１）岡本健一氏の新見解：「倭の女王卑弥呼の最後―「以死す」再考」、『蓬莱山扶桑樹』思文閣出版（２００８年８月）　　　　　　　  
  
**七、水行十日・陸行一月」の起点**  
私が「水行十日・陸行一月」の起点を帯方郡だとしたのは、著書⑤『邪馬台国は古代大和を征服した』（１９９０年 JICC出版）からです。  
  
魏志は、まず最初に「郡（帯方郡）より倭に至るには」と前置きして、前段の狗邪韓国から対馬国・一支国・末廬国・伊都国・奴国・不弥国の国々に至る行程を水行・陸行、方位、里数で表記しています。  
　次に後段の投馬国と「女王の都するところ・邪馬台国」に至る行程を水行・陸行、日数で表記しています。  
　次に二十一の旁国名のあと、「その南に狗奴国あり」とし、全行程の最後に再び「郡（帯方郡）より女王国に至るには」と記して「万二千余里なり」という里数の合計を記しています。  
　ここで注意すべきことは、里数と日数の行程記事の初めと終わりに「郡（帯方郡）より倭に至るには」と、出発地つまり起点を記していることです。  
魏志の行程記事は、上記の用例から見て、里数で記した行程も日数で記した行程も、両方とも帯方郡を出発点に女王国に至る行程を記しているのです。つまり 「郡（帯方郡）より倭に至るには」里数で書けば「一万二千余里」、その里程を日数で示せば「水行十日・陸行一月」と書いているのです。  
　行程記事は、里数にしても、日数にしても、出発地から到着地区までの国境間を数字で書いてあるから、算式を作ることができます。  
このような算式で、九州説・近畿説の行程を検討していくと、近畿説の算式は、里数＋日数＝里数という成立不能な矛盾を抱えた解釈論であることがわかりま す。　私（九州説）の算式は、郡から女王国までに経由する諸国の区間里数の合計が一万二千余里です。日数は、里数に加算できないものであり、郡から女王国 までの里程に必要な日数（水行十日・陸行一月）なのです。  
　近畿説を検討してみると、郡から不弥国までの区間距離の合計に、投馬国から近畿地方の女王国に至る（水行十日・陸行一月）という日数を加えた合計が「一 万二千余里」という数字なのだ、という解釈論なのです。、里数と日数を加えた合計が里数になるなどという距離概念を、果たして魏志の著者・陳寿が文章とし て記載したかということです。要するに九州説と近畿説の算式のどちらが当時の中国人の距離観に近いかを考えることです。  
　また先に指摘したように、魏志原文の記載には、「郡（帯方郡）より倭に至るには」里数で書けば「一万二千余里」、その里程（郡～女王国・国境間）を日数で示せば「水行十日・陸行一月」ときちんと正確に書いていることを再確認することが必要です。  
　このような行程記事の読み方が正しいかどうかを、改めて魏志の事例を調べて、再確認することが重要だと思います。私は、２０年前、１９８１年に出した本 （註1）で、里数と日数の関係を魏志の事例で検討していますが、まだ認められていないようです。魏志の中には、里数の行程を示してからその旅行に何日かか るかを述べた文例が少なからずあるのに、残念なことです（註2）。  
近年、考古学界で論じられている「狗奴国」東海地方論のように、邪馬台国論議における文献無視は目を覆うばかりの状態です。考古学界の文献無視に文献史学 者が追随している事態すら起きています。この両者の算式論の是非を魏志の事例で調べようという文献史学者も見あたらない、今日このごろです。  
  
節註1奥野『邪馬台国はここだ』１９８１年　毎日新聞社　224～225ページ。  
節註2「魏書」明帝紀第三。『三国志』(一) 洪氏出版社110～111ページ。  
  
（図）１０　　邪馬台国への行程  
  
本文注１０：奥野正男『邪馬台国は古代大和を征服した』南至耶馬台國、水行十日陸行一月」は、帯方郡から女王国までの一 万二千里にかかる水行と陸行の日数である―この解釈はすでに１９７１年に古田武彦氏が『「邪馬台国」はなかった』（朝日新聞社）で発表しているものです。 しかし、古田説は、陸行一月を朝鮮半島内や対馬・壱岐にとるなど、私の解釈とはだいぶん異なっています。  
魏志倭人伝は、国と国の区間を里数で示しています。  
不弥国から邪馬台国までの区間が、もし「水行十日・陸行一月」だとすると、『三国志』の撰者・陳寿は、各区間を里数と日数の両方を混用して書き、その総計 を一万二千余里という里数で示しているということになります。邪馬台国近畿説で「水行十日・陸行一月」を九州北部から大和への道のりとみる論者は、少なく とも陳寿が（直線行程で）里数と日数を混用したという前提に立っていることになります。しかし、『三国志「魏書」明帝紀第三の景初二年条に引用の『晋紀』 や『魏名臣奏』には、遼東の公孫淵を討つための軍議で、洛陽から遼東までの里数を、「四千余里」とし、これを行くのに必要な日数を「百日」としています。 また『後漢書』南蛮伝に、荊州から日南（ベトナム）までを「九千余里なり。三百日にして到る」と書く例があります。長途の旅程を里数で記した後、つづけて その旅に必要な日数を記すのは、文章としてもっとも理解しやい書き方ではないでしょうか。  
　こうした中国史書の旅程の記述方法を「魏志倭人伝」にあてはめると、「自郡至女王国、南水行十日陸行一月」という記述は、帯方郡から女王国までの「一万 二余里」の旅程にかかる日数であらわしたものといえます。同じように「南して投馬国にい至るに水行二十日」という記述も、帯方郡から水行での日数をあらわ したものと読めます。投馬国の位置は、「南水行二十日」という日数の史料だけで比定することはできません。あえて候補地をあげれば、水行二十日のうち、末 廬国までに十日費やしているから、残りは十日です。九州の遠賀川流域に、あるいは九州の東回りで豊前や宇佐に比定することもできる。（奥野正男『邪馬台国 は古代大和を征服した』１９９０年 JICC出版）。（おわり）

Controversy private record Yamatai Illustrated - "ten days in January go by land line" water origin - Okuno Masao   
  
([] Quarterly Yamatai finally celebrated the 100th issue. Contributor since the first issue, while questioning the world to poor historical discussion, I've been building for his own historical perspective, a quarter-century history of the magazine issue 100, my own and ordered a double exposure history. We are involved in the theory of my own Yamatai is a very personal history Yamatai controversy.) (lexical deficit in the calibration)   
  
One, remains the plain tomb Himiko   
I Yamatai quarterly magazine] Issue 2 (October nine thousand seven hundred ninety-one) to "Himiko mirrors is a mirror of the Han Dynasty, the tomb Hara Hitoshi" ①, magazine No. 5 (July eight hundred ninety-one Yes) to "Theory Kyuusyuu Yamatai - Demonstration of iron and mirror -" announced that the two historical treatise ②, while for us to stage Somaki magazine, entered the debate Yamatai. Watakushi, was 48 years old.   
  
拙 論 motivation to think, then, I have a mirror of the Yayoi period and iron, and royal tombs, the various objections and interpretations involved archaeologists, as taken in the debate thread 縺Re obvious Yamatai has to. To correct it, the facts of the archaeological definite first (and not a scholar), it is important to know Juan Yamataikoku were considered.   
Archeological community in the 1970s, for example, still, "Mirror Mirror Large Plain 仿製 the Kofun period (due today boy)" (1) the mainstream notion. The archeological community in Kyushu, "type Kinai Burial" is a new interpretation of Mochikoma, the tombs of the local "outsider Daimyo (What Myou and various)" was also called other university professors. Omonetsu to it and "lord of the plains country is grave," was also a researcher. Kofun lord (What Myou) and compared them, lord 三角縁神獣鏡 the mound in the center, was a feudal country, meaning that mirror expressions prevalent in the Han tomb late circumferential grooves old square. He has sent me six Harada Hiroshi, angry letter to 歯噛Mi there with me.   
Also at that time had become a big issue of the nature of highland villages. The highland village of Yamato to exist until around the Seto Inland Sea to northern Kyushu, the country precede the appearance of the Queen, "Wa crisis" that was vigorously disputes with the military defense capabilities. Archaeologists theory Kinai, with regard to weapons of war that swept the West, the obsidian of the Yayoi period (You Seki bodied) arrowhead made (barracking) or the I's sharpness, 石鏃 out of the village of Highlands (sure I cough) of emphasis was larger. [Rumor Wa J. Wei at this to come at the arrowheads, iron swords and feet five, in Kyushu in the middle of the middle Yayoi arrowheads, iron halberd iron (or railroad) to have emerged in the late late Weapon large together exceed 50 iron swords and iron sword is the fact that anyone who knows a little bite to archeology. The debate over weapons of settlements and upland, but we speak to people in Kyushu were no weapons of iron alone. Against archaeological, you're something weird, but I called, I was always out of my chest.   
Archeological community at the time, Mr. Ootsuka was president of the first heavy Japanese Archaeological Association, held in coming to Fukuoka Yamatai Shinpojiyuumu "archaeologists, who believe in the theory Kyuusyuu Yamataikoku is probably in no one person speak, "It was a situation that boasted. If just that, well, by all means, but 論Jimasen, archeological community in Kyushu at the time, young researchers, as pandering to advocates Kinki "Now, archaeologists in Kyushu, the theory has taken Kyuusyuu Yamatai People will not be alone, "and so it does not respond. This will not change even today.   
  
① discussion is a 三角縁神獣鏡 Himiko "a hundred bronze mirrors" (Takashi Kiyou) theory and Kobayashi (2) Taishi, the mirror is a mirror and Himiko Han. In addition, large mirrors and a large number of Han in the late Yayoi Japan (expression) with a group of royal tombs Hara Hitoshi mirror Amaterasuomikami (bite out Amaterasu O), called "Tomb of God" theory was Harada (3) Nitai , and remains the plain "Tomb of God" rather than "human grave," he said and wrote it for granted.   
② discussion is to clearly based on a national scale excavation report of the Yayoi period excavated Iron First, there was still time "Iron Yayoi period excavated places table" (Table 1) I made.   
  
  
  
Yayoi period excavated State of Iron (1981)   
Other Total iron halberd iron arrowheads, spear tool steel iron sword iron sword state name   
9 15 80 22 38 211 375 Hukuoka   
Saga 46 22 4 2 4 7 7   
Nagasaki 95 54 15 3 3 17 3   
0 1 0 0 6 212 219 Kumamoto   
2 0 0 20 88 0 110 Ooita   
Miyazaki 16 4 10 0 0 2 0   
Kagoshima 27 6 12 0 0 9 0   
Yamaguti 19 13 5 0 0 0 1   
Shimane 11 11 0 0 0 0 0   
5 4 1 0 0 0 0 Tottori   
Hiroshima 13 12 1 0 0 0 0   
Okayama 20 19 1 0 0 0 0   
1 1 0 0 0 0 0 Tokushima   
Kagawa 41 40 0 0 0 1 0   
Ehime 14 11 3 0 0 0 0   
2 1 3 0 0 0 0 Kouti   
Oosaka 33 14 19 0 0 0 0   
1 0 0 0 0 2 1 Wakayama   
1 1 0 0 0 0 0 Nara   
Total 1051 721 182 34 78 16 20   
  
Excavated in the Iron Age to the mirror and concentrated on the northern Kyushu Yayoi China, Kinki, Nara Prefecture, and in particular the fact that none of the reclamation (the archaeologists know), perhaps the first time in the eyes of Juan Yamatai I think it's mentioned. The distribution of iron (spread) that at first glance, nothing matters, and what kind of objections "different interpretations" Do you think there is. It was his criticism of the Sahara Makoto ① Tasuru 拙論 archaeologist after touching the "iron hypothesis bronzite recovery" or "practice the presence of 副葬" theory shows up frequently.   
Sahara Makoto said, the "iron and bronzes of the Yayoi period, even the Kinki region, there are a lot like the Kyushu region. However, in the Kinki region, the old copper, iron, and play it using salvage the remains remained for. mirror and there is no iron in the Kinki and Yayoi graves (not no thing) did not practice because 副葬 "I insisted. (Section III, "the beginning of endless controversy.")   
② Matters In addition, bronze mirrors the Yayoi period excavated places table (Table 2) I made. Kobayashi in theory this table "had been imported into the Kinki region," the assumption that "the Chinese middle Yayoi mirror (mirror world transfer)" did not put any numbers. By this table, mirror Han generations have Yayoi unearthed in excavations, Mirror Han, mirror domestic small, as excavated Iron Age, the northern Kyushu (Fukuoka, Japan in particular) were excavated to concentrate, and Nara is none knew Obviously with the fact Hitoshii. Himiko Kinki theories archaeologists and "a hundred bronze mirrors," 三角縁神獣鏡 spent on the ruins of the Yayoi period excavated in the mirror without even a piece, the fact that reality mirrors the Kofun period, first evil Juan 示Shitakatta is clearly one horse country.   
Kobayashi's world mirror transmission theory, the mirror does not exist in China, Middle Yayoi Kinki region, archaeological drift "hands" for a sense of recognition, such as if the fact existed as if they were archaeological intended to assume, as a scientific epistemology would be something negative. Since, however, throughout the century 30 years, Kobayashi's "No 笵鏡 分有 the relationship" theory, a Japanese archeological community has become a main pillar of the theory of unsurpassed forgive Kinki Yamatai . (Moved here a part of 2)   
Yayoi bronze mirror   
  
Total domestic mirror compact mirror in a row after the Han various flowers Aya Kiyou Han mirror mirror how name 規矩 Rating Province   
7 21 37 32 209 112 Hukuoka   
Nagasaki 18 11 3 1 3   
2 1 3 6 Ooita   
Saga 2 1 2 8 13   
Kumamoto 6 6   
1 1 Kagoshima   
Okayama 1 4 5   
1 1 2 4 Hyougo   
Yamaguti 3 3   
2 2 Ehime   
1 1 Kagawa   
1 Hiroshima 1   
1 Oosaka   
1 1 Wakayama   
Ishikawa 4 4   
Toyama 1 1   
1 Toukyou   
Total 112 277 45 11 27 82   
  
  
  
Table 1 First, please look at Table 2. Iron and bronze mirrors of the Yayoi period (numbers in the early 80's) is in large part out of the northern part of Kyushu. Iron Yayoi period, increasing the number of excavation, even now the total number of computers can understand, the tendency Kawarimasen.   
Most of the Western Han mirrors also that guy out of the territory of the country rather ambitious Ito Wei, Himiko and political relations before, and I thought that the secrets to the origin of important national issue in Japan, I have been considered.   
Legends of the Kojiki advent of the descendant of a god, Amaterasuomikami the descendant of a god Ninigi life (and witch), the jewels Kiyou Kusanagi sword (that is sure Ginotsurugi) bestowed a mirror "is dedicated (Bomber has) soul control my colleagues (try and) worship as (when) Bong come (pine) and "decree and () Ri," 竺紫 (horsetail) Hinata (Himuka) Takatiho No (Ho Tokachi or) Taki flow fabric Professional Division No ( Colorful bamboo lottery) "to dictate," 此地 Korea (from Realms) towards, Kasasa (the bulk) the presence of (Misaki), came true (Magi) to the street, direct insertion of the morning sun (the only) The State, Sun shines on Sunset 国Nari. late (him), here is 甚 (the Most), Gil (I) The place came (I) "I said. Advent tradition of this descendant of a god, rather than historical facts, it is important to understand as a folkloric tradition only. When I think of the legends of history and mythology, the Mori Ougai always "humming in Kano," such as novels, written in a series of high treason incident end of the Meiji (4) to organize his head back has to.   
God is making a grave. The tomb, what would the death of a human-made watch Negau eternal peace of the soul. Try a lot of local and mirror Itoshima 副葬 tomb of the origin of Sun Worship Yayoi land, Princess Yi ball to the corpse, the plain-Amaterasu (the sun god 靈 Dainiti wife (oh Hirume) Tomita Harada theory, I can understand the context of folklore problems. The recognition that history is not myth, hailed as a Japanese defeat in the Meiji Constitution was the flag that I listed a little.   
Kyushu is also found in the ruins Yoshinogari 1990s, the ancestral spirits in rituals Matsuru the winter solstice summer solstice in the morning were the Wei, China has been found in the north inner ward. I have Yoshinogari Site "at the Queen City" and the summer solstice, winter solstice ritual to their north inner ward I think something is Toriokonatta Himiko. Archaeological evidence of the literature and folklore (five, a new reading of the Journal of the transfer 倭人 Wei), written in.   
  
Note 1: Okazaki Takashi "Mikumo Ihara age of the plains" [3 Kyuusyuu Ancient Japan (Kadokawa Shoten, 1970), "Ihara, three clouds are clearly Yayoi jar coffins expression. Mikumo, the county town of Haruhi Tsukushi Okamoto 須玖 remains, coffins and jars can be compared with bronze mirror discovered in the ruins of the city Tateiwa Iizuka. the Middle Yayoi jar coffins (須玖 formula), the mirror is subject to the Western Han mirrors. Ihara, like Baba Sakura Karatsu, urn Early and Late Yayoi coffin, that is based on those ratings 規矩 four 神鏡. During this time, in the same time as the upper 原No辻 Iki, Kushiro is made of copper shaped bronzes Ba Cu Nakahiro spears. 神鏡 who rated four 規矩are those of the early Han Dynasty 莽代 and after the king] [漢書 after two years of Emperor Guangwu Hazime Naka (vii v) whether the timing of the tribute he Wa State, the first year of the Emperor's first permanent safety (seven hundred and one) of献Jita time student who has Mouth elevation sixty-one Yes Wa king master, it would be given to Japan four 神鏡 規矩 much better ratings. Kagami Osamu Nobuko 孫内 line flower design from the jar coffin tombs at present unprecedented discovery. The coffin ceremony boxes Miyahara Haramati incense county Tagawa, a mirror flower design line within this expression 舶載? products (domestic) have come up with a mirror flower design lines in the compact. Currently, 仿製 Yayoi period the mirror is a mirror flower design lines within the large, such as the plain has not been found one side, and 壙墓 Sat plain, there is no evidence this is the Yayoi period so far. In Kinai the early Kofun period of Kobayashi's theory of forms of transmission mirror world, the mirror does not exist in China, Middle Yayoi Kinki region, archaeological drift "hands" for a sense of recognition, such as whether the facts existed as if they were archaeological intended to assume that, as a scientific epistemology would be something negative. Since, however, throughout the century 30 years, Kobayashi's "No 笵鏡 分有 the relationship" theory, a Japanese archeological community has become a main pillar of the theory of unsurpassed forgive Kinki Yamatai .仿製 mirror has been cast, would review the future Matsubeki point. (Okuno Summary) "   
  
Note 2: Kobayashi Yukio, "三角縁神獣鏡 research" [xiii] Kaname Osamu Letters, Kyoto University (September Syouwa forty - six years), the "Made in China 三角縁神獣鏡 same 分有 No 笵鏡Relations "(Figure 3) was published. No 笵鏡 分有 the relationship is a mirror made of the same mold 三角縁神獣鏡 大塚山 Tsubai tombs excavated in Kyoto (笵鏡 same) things are connected by lines radiating out around the tumulus. This paper, "said 笵鏡 inventory" is a 227 plane 笵鏡 the 50 species (169 三角縁神獣鏡 Chinese side, 仿製 (because more) plane 三角縁神獣鏡 58) has been described. At that time, the number of known 三角縁神獣鏡 plane had reached 375 (Okuno Masao Yamatai [Mirror] 1982).   
Kobayashi said the corpse, the tomb 大塚山 Tsubai "a hundred bronze mirrors," assuming the parties settled all over, "has been imported in the mirror when the first three years of Himiko Yamatai scenes (nine hundred thirty-two) in thought to be used immediately to 遣 Wei Suppose the mirror these are around fifty years the two have already been imported, "" the end of the fourth century the posterior to the tomb 副葬 "is assumed to . (Kobayashi Yukio, "said 笵鏡 considered" [1978] study of the Kofun Period)   
In addition Kobayashi, "mirror mirror world transfer theory," the hypothesis that Tateta.   
"China's Middle Yayoi ⅰ mirror, even the northern Kyushu region had been imported into Japan.   
In northern Kyushu was 副葬 ⅱ tomb in the mirror.   
There is no practice in the Kinki region of 副葬 ⅲ mirror world was like a family heirloom from generation to generation transmission   
Since the mid-mirror world ⅳ Han transfer nearly 300 years, for use drift "hands" have left traces.   
Yamato regime established in the Kinki region ⅴ, made around the tomb, the significance of the world Usure Proceed among the hereditary transfer of private property and position, the mirrors will eventually led to the tomb to 副葬. "(Okuno summary)   
  
  
笵鏡 分有 relationship of the same Chinese 三角縁神獣鏡 1 (Kobayashi Yukio)   
  
  
Note 3: The Myth of six real Harada Masaru] (Student's 1966 annual.) Harada said, criticizing the theory of Kobayashi and transition among the royal tombs from the Yayoi to the Kofun period, a mirror ball was passed by the ruins of plain sword Kyushu (Three Sacred Treasures) 副葬 well, and the king tomb emphasize the fact that we have inherited and the tombs of the Kinki region in the external structure and occupied land.   
Mr. Harada, concluded: "The descendants of the corpse of Yayoi Kofun plain, began to further develop the tumulus culture moved to the Kinki region," he writes.   
Harada said of this book, "Conclusion", and all about the people buried in the ruins of the plain, "the ancient shrine of 高祖山 Koso is enshrined in western 咩 Hi Iso Takashi (Taka its princess) and I, Inc. 怡土shrine enshrining several gods that had been with the county, my leave has been a mystery until the end ", and that turning to the shrine deity Koso. Hikohohodeminomikoto is excused, Princess Yi ball left the seat. Yi is the child of Princess Hikohohodeminomikoto ball, which is an alias of the Emperor Jinmu. Mr. Harada, Hi Iso Takashi 咩 Koso Shrine Shrine from this arrangement (its princess Taka) seems to solve the mystery.   
"Princess Yi ball is buried in the tomb figures Yayoi plain, and was honored by Queen Amaterasuomikami Hiroshi Hazime both living death. The shrine enshrining several gods were worshiped Princess Yi County 怡土 ball, the Ito before the State Government. Yamato, which was the capital from the country. Ninatsu was equivalent to the significance of God and praised the Amaterasuomikami 皇祖 enshrined in Ise Shrine Yamato dynasty. But, by Tadashi Azuma Jimmu , for the Yamato dynasty conquered the Japanese islands, there are two 皇祖 God was not necessary. two days in heaven (Nijitsu) is not. God, the country's history, along with Ito, away from the consciousness of the Yamato Court obsession , Kojiki is written down and the time is Nihonshoki the Yamato Imperial Court no longer domicile, or where are the details that had gotten confused. "   
  
Note 4: 1912 works Ogai Mori "" The Kano humming, "" Hiccups (tight inverse) (hiccup) "Huzidana" It appeared to work with and Gozyou 秀麿 hero. This is the civilization of our country have criticized the novel through the eyes of an adult student named Yoko 秀麿 return, it is likely to 秀麿 thought about Ogai.   
秀 麿 are coming to study history in Berlin, not history national history was Sada Kimi in our country at the time, you can claim publicly that, you know that Hikiokosu friction uncomfortable with the surroundings, including his father, doing nothing are forced to. His order to resolve the conflict, "humming in Kano" is sympathetic to the philosophy and at the same time to support this myth must feel vulnerable inner order of Emperor grave does not help with, no doubt in order to live that again, people who advocate the self-claimed, in the emptiness of life, even of moral inferiority, makes him frustrated. One of the things 秀麿 still "under a hammer (Chi s fine one)" (two years Taisho), as it is spelled 実見 author probably "寵 heaven (butterfly heaven)" (four years), and then only in Japan has drawn a positive type of person that we find with these exceptions, as well as what did not satisfy him. "(Nakamura Mitsuo's History of Modern Japanese Literature - Meiji Chikuma Shobo.)   
  
Two mirrors, mirror what do Himiko   
Himiko mirrors and the mirror formula ⅰ Han   
Himiko Inquiry into the mirror, in the first place, then was sent to the use of Yamataikoku Wei, it is necessary to clarify whether there was a mirror to what Rakuyou Wei capital. Then they Wei ・ make clear that what has been excavated from every region of the three-century-something Susumu Kiyou Wa, I think the move would mirror steps will be maintained in an archaeological way.   
The form of bronze mirror generation Wei, mirror 規矩 case who is an expression mirrors since the Han Dynasty, Aya Kiyou flower row in the mirror Beast Head, mirror zodiac, mirror pelycosaur, mirror Feng Ci, Aya Kiyou Feng double-headed dragon, Itaru place三公 Mirror, mirror image text band Divine Beast, and a mirror image. Various mirrors have been made to continuously strengthen the trend of teen Wei while simplifying the late Eastern Han. However, in the northern Yellow River basin since the end of the war continued Nishi Susumu, bronze mirror production has stagnated. Azuma Susumu south, early Southern Dynasty (early fourth century) has reached a stable social conditions, production of bronze mirrors were active. The form of the bronze mirrors that, Susumu east of Kure teen three centuries until the early south morning, stylish mirror image mirror and a divine beast band statement paintings, mirrors divine beast zone statement drawing particular is made up of many formula milk cyclic expression and contraposition Masu. (Ed. anthology bronze mirrors excavated Zhejiang Shilin Wang [1979])   
Review by Wa mirror is brought into China the previous year, multi-Aya Kiyou 鈕細 Yayoi first established in the county Wave Music (108 years ago), the wake, the coffin in northern Kyushu Yayoi jar in the mid-Western Han mirrors 副葬is. Then, from the late Yayoi end, the tomb stone coffin burial box type changes, 壙墓 soil, and 木棺墓 mirror formula after the Han (Takashi Susumu 鏡) has been 副葬. Rectangular peripheral groove grave Hara Hitoshi (bamboo wooden coffin ceremony percent)), but to a large number of Han 副葬 expression mirrors. The large plains domestic mirror (diameter 46.5cm) model was made in line flower Aya Kiyou Han style later stage 5. Plains of large domestic Mirror, mirror domestic production became the model for subsequent Kofun period.   
Late in northern Kyushu Yayoi tombs of the end through the early 1980s, after the Han mirror formula (鏡 Takashi Susumu), 85 cases have reached the surface 副葬 No.   
Species Sono Kiyou the mirror 規矩 rated better, Aya Kiyou flower row in the mirror Beast Head, mirror zodiac, mirror pelycosaur, mirror Feng key, mirror Aya Riyuu headed, Hiroshi Kiyou three Solstice position, mirror divine beast band sentence planning, and mirror images You can see that, in the Wei ・ contained in northern Kyushu Susumu Kiyou. In addition Kyushu Yayoi and the late minutes - has unearthed 93 fragments of the mirror surface expression of the Han Dynasty tombs and ruins from the end. ([O nations and cultures in Kitakyushu ー dig Ancient Yayoi Kagami, Kitakyushu Museum of Archaeology, 1991].)   
Han mirrors can be confirmed that the expression was brought to northern Kyushu from the late Yayoi period until the end of life as described above (Takashi Susumu 鏡) what, could be said to mirror Tsuyoi Himiko.   
The terminal phase of the Yayoi period, the fact that the excavated mirrors Takashi Susumu exceeding 100 plane in northern Kyushu, the future will be to bring significant further amid the growing 獸鏡 God margin triangular excavated from ancient tomb .   
  
Ⅱ 三角縁神獣鏡 puzzler   
② the discussion Quarterly Yamatai [August] was selected to commemorate the launch, "三角縁神獣鏡 research - focusing on the theory of ancestral lineage and form -" No 三角縁神獣鏡 study patterns of shape Kasamatsu ③ In the essay, received an award for local history research 新人物往来社 sixth.   
The 1981 study based on the following day and iron mirror, first discussed the location of Yamatai Yamatai is here] [④ (Mainitishinbunsya) published, based on known or discussion ③三 角縁神獣鏡 (375 plane) to classify the type, form and ancestral lineage made it clear that [Mirror Yamatai - 三角縁神獣鏡 puzzler -] ⑤ (新人物往来社) two books published the.   
⑤ The contents of the book, and studied the genealogy of shape and form of the father of 三角縁神獣鏡, The pattern of this mirror design, the diagram shows the origin and evolution of the form (Figure 2, Figure 6) to 作Rimashi or.   
  
Ancestral lineage of the mirror to animal form and accompanied Shikigami 2   
  
  
Genealogy and ancestral form of expression mirrors the Han Dynasty unearthed in Japan Susumu Kiyou Wei 6   
  
  
Following is an overview of this genealogy.   
三 角縁神獣鏡 the mirrors, the Chinese model (top) taken from various Chinese design patterns (those rated 規矩 zodiac crest crest crest of serrated Sumi Yukari three main zones within the district Tadashi Yukari stereotyped image ) is. Meanwhile, the Chinese theory of the mirror patterns in various non-Chinese there (a small suckler crest zone district and outside the lower right Kasamatsu 鈕孔 rectangular shaped pattern in Figure 6) is. The animal species Shikigami way mirror image accompanied crest Han Three Kingdoms period within the district after 三角縁神獣鏡 model (Figure 6 - Mirror ①) is 12 ~ 3cm diameter mirror with a relatively small Tyuugoku It is. Meanwhile, the Mirror Kogane mound in Izumi Ward captured the mirror Oosaka ⑦ ① (fingerprint images accompanied-way mirror Shikigami Beast Tadashi Yukari Jing Ming's first three years middle) are made twice the diameter mirror large reclamation .   
Then the middle mirror, the Ming tombs Torikonda ⑧ shrine in Shimane Kambara three main crest of the first district in the mirror and landscape mounds Kogane Oosaka Izumi ⑦ The Fetch system triangle edge mirror image Ryou Kiyou ④ ⑤ China's top panel On the other hand, the design incorporates a rectangular pattern 鈕孔 non-Chinese.   
Yamaguti ⑮ Zhou tomb of the house mirrors the lower mirror, Gunma Kanizawa Burial ⑯, three pieces of the mirror is a tomb 大塚山 ⑰ Kyouto Tsubai, ⑧ district in the middle - the main crest Fetch ward off the edge of the mirror triangle tomb shrine Kambara On the other hand, incorporates the pattern of rectangular shape 鈕孔 Kasamatsu non-Chinese pattern design.   
In addition, these 三角縁神獣鏡 mirrors, multiple isomorphism (5) is present in the surface may also count the nine.   
  
(5) Sister mirror and previously, Mr. Kobayashi, "said 笵鏡" which had been in, and many times they knew the could not use a clay mold, the same model he used more than once Higuti Takayasu and products of the same type (mirror) to make a new mold for the prototype sequential "stepping back" is also a mirror of a mirror isomorphism. Now, even the commentators and Takashi Kiyou 三角縁神獣鏡, mold mirror "isomorphism" Many believe that.   
  
Three, get people (KJV to) forging Han (Chi Kanu from) table element (Takuso) Su Kawabe Sato and home of the family register (Takuso) Gil Professional (kishimen)   
In the early 1970s, I studied with Mr. Ooba Norio Fukuoka scholars of ancient iron, steel remains the gold district in feces and Imazyuku Oka Hazime district of Nishi-ku, Fukuoka (Guso Kana) (steel slag) to collect the While help was to study ancient history. Mr. Ooba is a founding member of the Committee on Tatara, steel remains of the Han Dynasty in Henan Province [鞏県 Tyuugoku (Ken today) 鉄生 groove] (Tatara Shobo), translated and published studies of ancient iron Hukuoka If you are wearing the road.   
Mr. Ooba the Oka Hazime and Oohara (PARANORMAL O) where I'm going to take the iron slag, "Here is what some groups iron furnace. 途切Renu production as per-formed a rotation smelt There, "and said it was forecasted that the marks given furnace in the basement now.   
The Oohara (PARANORMAL Oh) and iron slag excavated pond area near the coast Kanakuso "Iron Sand Ohara titanium is close to zero. Hakata Bay should be in the sand of the Yayoi period finery always" refining the Yayoi period and sand talked a theory.   
To ② Matters I said, "Production of metal Yamatai" There Akira Hazime called "the iron in ancient Japan, and China Southern Tyousen ・ while influenced by local Enami, which started in northern Kyushu to the raw material sand or "assume, and refining the estimate of land area and Ito country guy country Yamatai Yayoi period excavated from the Iron Age (Fig. 7).   
  
Estimated area excavated earth and iron in the late Yamatai in northern Kyushu Yayoi 7   
  
  
Can be estimated as a basis for such a discussion ② I was codified in the ten years he took Ooba "iron relics, Fukuoka Prefecture (iron slag excavated ground) places the table" (Kazuo Sawa Yanagi] [Hiroishi tombs) to 使Imashi or. This places the table, and now one person who Imazyuku 顧Miyou Ito Shina researchers ancient iron (Yuku Imaji) Uenohara (Haru Ueno) Yakeyama (or until baked) (bottom of the furnace slag remaining nine C14-1660 ± 30 Hiroshi Satoshi, 1960) gave an iron slag excavated area locations, including Hukuoka Itoshima District 120. However, the research centered around in ancient Japan Steel Institute Tatara is now gathering the Yawata Steel Engineers Institute analysis of iron slag from the analysis of work this time around, the results of the analysis, six centuries old iron went toward refining that no calm. Also, as it overlaps, the archeological community, assuming the crisis and competition over the Iron Wa, a result of winning that fight, "the early Iron Age Late Hashi Yayoi spread through the Kanto region, and expelling the stone Fantasy and "(2] Terasawa Kaoru Birth royal history of Japan) has been heavily covered.   
Yayoi era insisted that I iron production, the production of Hakata Bay Imayama from stone axes, while the late Yayoi discontinued early, late Yayoi wrought iron axes and large-sized equipment as cutting iron weapons (swords, iron swords, iron 弋) is that it spreads to agricultural tools and the like 鉈鎌 手鎌. A causal relationship between the two stop the spread of iron and production of stone axes, I was thinking about cutting tools and innovations that appeared to shift from the iron ax ax. And "low Ohara Titanium Iron Sand," "Using low-titanium iron sand, iron can also Yayoi" While listening to the teacher Ooba theory that iron production in Fukuoka, a small iron 先進地 Yayoi Period also had the idea, so I thought I was.   
One day, sir, "ancient history if you do, But do not not read classical Chinese. Look to translate it yourself," and The 簡史, China Metallurgical (Ed. Steel Institute Beijing) has passed. China and Japan in a small dictionary, it took about half a year to read this book. The book is now ancient Japanese researchers Steel "common sense" law has become as steel fry (Shaoxing more) (method in a furnace to make steel), or the smelting slag or slag slag and iron Kazi how to determine, and the expansion of the cross section with photos listed iron slag, it has become a bible for our analysis of the shop, later found. Mr. Ooba, you can also read it and probably did, I noticed later.   
Also, one day, the teacher [Registration Kawabe Sato county Shima Chikuzen two years Taiho] showed a copy of handwriting, "edited by three Takeuti Satoshi [literary remains 寧楽] in the book, I do research on the family register this," was said. I recorded the hands of people 応神 (KJV to) forging Han (Chi Kanu from) table element (Takuso) and come home with the family register Su Kawabe Sato Taiho two years (Takuso) Gil Professional (kishimen) examined the person named. Seo word (word) is a Korean word meaning ancient iron, Taku 美称 that, at that time, I learned Friends Nishitani Akira moved to Kyushu University.

Genealogy and ancestral form of expression mirrors the Han Dynasty unearthed in Japan Susumu Kiyou Wei 6  
  
  
Following is an overview of this genealogy.  
三 角縁神獣鏡 the mirrors, the Chinese model (top) taken from various Chinese design patterns (those rated 規矩 zodiac crest crest crest of serrated Sumi Yukari three main zones within the district Tadashi Yukari stereotyped image ) is. Meanwhile, the Chinese theory of the mirror patterns in various non-Chinese there (a small suckler crest zone district and outside the lower right Kasamatsu 鈕孔 rectangular shaped pattern in Figure 6) is. The animal species Shikigami way mirror image accompanied crest Han Three Kingdoms period within the district after 三角縁神獣鏡 model (Figure 6 - Mirror ①) is 12 ~ 3cm diameter mirror with a relatively small Tyuugoku It is. Meanwhile, the Mirror Kogane mound in Izumi Ward captured the mirror Oosaka ⑦ ① (fingerprint images accompanied-way mirror Shikigami Beast Tadashi Yukari Jing Ming's first three years middle) are made twice the diameter mirror large reclamation .  
Then the middle mirror, the Ming tombs Torikonda ⑧ shrine in Shimane Kambara three main crest of the first district in the mirror and landscape mounds Kogane Oosaka Izumi ⑦ The Fetch system triangle edge mirror image Ryou Kiyou ④ ⑤ China's top panel On the other hand, the design incorporates a rectangular pattern 鈕孔 non-Chinese.  
Yamaguti ⑮ Zhou tomb of the house mirrors the lower mirror, Gunma Kanizawa Burial ⑯, three pieces of the mirror is a tomb 大塚山 ⑰ Kyouto Tsubai, ⑧ district in the middle - the main crest Fetch ward off the edge of the mirror triangle tomb shrine Kambara On the other hand, incorporates the pattern of rectangular shape 鈕孔 Kasamatsu non-Chinese pattern design.  
In addition, these 三角縁神獣鏡 mirrors, multiple isomorphism (5) is present in the surface may also count the nine.  
  
(5) Sister mirror and previously, Mr. Kobayashi, "said 笵鏡" which had been in, and many times they knew the could not use a clay mold, the same model he used more than once Higuti Takayasu and products of the same type (mirror) to make a new mold for the prototype sequential "stepping back" is also a mirror of a mirror isomorphism. Now, even the commentators and Takashi Kiyou 三角縁神獣鏡, mold mirror "isomorphism" Many believe that.  
  
Three, get people (KJV to) forging Han (Chi Kanu from) table element (Takuso) Su Kawabe Sato and home of the family register (Takuso) Gil Professional (kishimen)  
In the early 1970s, I studied with Mr. Ooba Norio Fukuoka scholars of ancient iron, steel remains the gold district in feces and Imazyuku Oka Hazime district of Nishi-ku, Fukuoka (Guso Kana) (steel slag) to collect the While help was to study ancient history. Mr. Ooba is a founding member of the Committee on Tatara, steel remains of the Han Dynasty in Henan Province [鞏県 Tyuugoku (Ken today) 鉄生 groove] (Tatara Shobo), translated and published studies of ancient iron Hukuoka If you are wearing the road.  
Mr. Ooba the Oka Hazime and Oohara (PARANORMAL O) where I'm going to take the iron slag, "Here is what some groups iron furnace. 途切Renu production as per-formed a rotation smelt There, "and said it was forecasted that the marks given furnace in the basement now.  
The Oohara (PARANORMAL Oh) and iron slag excavated pond area near the coast Kanakuso "Iron Sand Ohara titanium is close to zero. Hakata Bay should be in the sand of the Yayoi period finery always" refining the Yayoi period and sand talked a theory.  
To ② Matters I said, "Production of metal Yamatai" There Akira Hazime called "the iron in ancient Japan, and China Southern Tyousen ・ while influenced by local Enami, which started in northern Kyushu to the raw material sand or "assume, and refining the estimate of land area and Ito country guy country Yamatai Yayoi period excavated from the Iron Age (Fig. 7).  
  
Estimated area excavated earth and iron in the late Yamatai in northern Kyushu Yayoi 7  
  
  
Can be estimated as a basis for such a discussion ② I was codified in the ten years he took Ooba "iron relics, Fukuoka Prefecture (iron slag excavated ground) places the table" (Kazuo Sawa Yanagi] [Hiroishi tombs) to 使Imashi or. This places the table, and now one person who Imazyuku 顧Miyou Ito Shina researchers ancient iron (Yuku Imaji) Uenohara (Haru Ueno) Yakeyama (or until baked) (bottom of the furnace slag remaining nine C14-1660 ± 30 Hiroshi Satoshi, 1960) gave an iron slag excavated area locations, including Hukuoka Itoshima District 120. However, the research centered around in ancient Japan Steel Institute Tatara is now gathering the Yawata Steel Engineers Institute analysis of iron slag from the analysis of work this time around, the results of the analysis, six centuries old iron went toward refining that no calm. Also, as it overlaps, the archeological community, assuming the crisis and competition over the Iron Wa, a result of winning that fight, "the early Iron Age Late Hashi Yayoi spread through the Kanto region, and expelling the stone Fantasy and "(2] Terasawa Kaoru Birth royal history of Japan) has been heavily covered.  
Yayoi era insisted that I iron production, the production of Hakata Bay Imayama from stone axes, while the late Yayoi discontinued early, late Yayoi wrought iron axes and large-sized equipment as cutting iron weapons (swords, iron swords, iron 弋) is that it spreads to agricultural tools and the like 鉈鎌 手鎌. A causal relationship between the two stop the spread of iron and production of stone axes, I was thinking about cutting tools and innovations that appeared to shift from the iron ax ax. And "low Ohara Titanium Iron Sand," "Using low-titanium iron sand, iron can also Yayoi" While listening to the teacher Ooba theory that iron production in Fukuoka, a small iron 先進地 Yayoi Period also had the idea, so I thought I was.  
One day, sir, "ancient history if you do, But do not not read classical Chinese. Look to translate it yourself," and The 簡史, China Metallurgical (Ed. Steel Institute Beijing) has passed. China and Japan in a small dictionary, it took about half a year to read this book. The book is now ancient Japanese researchers Steel "common sense" law has become as steel fry (Shaoxing more) (method in a furnace to make steel), or the smelting slag or slag slag and iron Kazi how to determine, and the expansion of the cross section with photos listed iron slag, it has become a bible for our analysis of the shop, later found. Mr. Ooba, you can also read it and probably did, I noticed later.  
Also, one day, the teacher [Registration Kawabe Sato county Shima Chikuzen two years Taiho] showed a copy of handwriting, "edited by three Takeuti Satoshi [literary remains 寧楽] in the book, I do research on the family register this," was said. I recorded the hands of people 応神 (KJV to) forging Han (Chi Kanu from) table element (Takuso) and come home with the family register Su Kawabe Sato Taiho two years (Takuso) Gil Professional (kishimen) examined the person named. Seo word (word) is a Korean word meaning ancient iron, Taku 美称 that, at that time, I learned Friends Nishitani Akira moved to Kyushu University. Recorded elements 応神 desk (Takuso) and Kawabe Sato Su house of the family register (Takuso) Gil Professional (kishimen) times are different, but I think family steel engineer. No Riyou Hiroshi Su Gil professional home county 怡土 is surrounded by earthworks Koso Korean style at the foot of the fortress Koso (The Taka) Castle (社地 Koso Shrine) live, No additional Itoshima Department (Gaya), Iron Mountain fan In the ruins, using high quality iron sand beach Ohara, had a successful first refining Tikuzen sand, Gaya system Kan Kazi (Kazi (Chi Kanu) Master Kim (Kanaji)) or would not - This is my first historical treatise. ("History of silicon 鍛卓" Korea in the Korean culture in Japan [No.] 24, 1974).  
  
Beginning of the Heisei then passed nearly three decades, has already become defunct Ooba and teachers, the district decided Oka Hazime Nishi-ku Fukuoka, Kyushu transfer of land, excavations in the area began its strange. It appeared eight century ruins of steel long time to break up the rest from there. Tatara relics from the valley of the Oka Hazime, as I was told that Mr. Ooba, the site slopes slightly shaved flat valley, also appeared in a row based on a whopping 28 steel box-type furnace. As I came out of the ruins Ooba teacher said. This is a major steel plant groups say remains very ancient ruins, many of these sites in Izumo Tatara has not been found yet.  
Oka Hazime also from the ruins "□ □ year of the Dragon Iron Jin Kan" for wood strip that were unearthed. "Im year of the dragon" is Niatari 752 years, are in an age Su Gil's home was very professional living.  
Tablet "□ □ Iron Kan" in the space provided, I secretly Kan Iron (Chi Kanu from) a devoted family register the name of Su's home and enjoy alone.  
In June 1979, a prototype of this article ② "Iron Queen Himiko" (70 sheets) to write an old friend, headed by Masao Hukumoto Gozyou] [ancient culture (No. 15 No. 16) announced the was.  
Speaking only the result, iron excavated places this table (Table 1), and later write 三角縁神獣鏡 diagram of (Figure 2, Figure 6) to make, and is not spent most of the 1970s.  
Reports gathered around to make a table place names excavated iron is present at the time many in the excavation, the power of money and time as non-individuals (Getdata) was consuming.  
  
Four, the beginning of endless controversy  
② Matters July 1980] [Yamatai Quarterly published in No. 5, was voted best film of the launch of a commemorative magazine articles. Immediately after that, with archaeologists Sahara Makoto "rusty iron or disappear. Salvage what there really is" is not strange that the debate begins and, before that, make the best of my papers Scripture says beauty editor chose Yasumoto (Note 6), let me quote.  
Editors Yasumoto above "order" are after then [I] in his book Yamatai quarterly, and "hearsay J. Wei Wa" I deployed in the context of his theory, the body later sections ( Six new reading 倭人 J. Wei transfer) to be written in.  
  
Well, one day] [Yamatai Quarterly September 80 Issue 5 out, soon, a moment "thunderclap (Hekireki)" has the feeling that a phone call - in the evening edition of Asahi Shimbun, Sahara Makoto (Makoto ) I have insulting you by name's paper - "Caring for the ancient cultures of East Asia" was a friend. Archaeologists at the time, banged at the forefront of the criticism was the theory Mr. Kyuusyuu Yamatai was Mr Tanabe Syouzou Sahara. Both men, in the late 1960s came to archeology courses already in joint names, the theory and the theory of moving the capital east Kyuusyuu Yamatai "Tadashi Azuma Jinmu ghost myth" (Note 7) I was writing and Kimetsukeru intense criticism.  
No moving the capital east Yamataikoku theory is a ghost of what Jinmu Tadashi Azuma myth. I do not claim that the iron is still very popular in the late Yayoi Kinai region will be caught on what Mr. Sahara. Friend's letter arrived three days later, I was in the newspaper clippings.  
  
(Note 6) in the "seven hundred thirty-two Guide Entries, outstanding tour de force is his theory of Yamatai Kyuusyuu Okuno Masao - Verification by iron and mirrors - a. Yamataikoku study, one of the spoken language of the future shows. If the data shows a mirror and iron are completely professional. To date, related to the problem of evil horse country, iron and mirror data (data on iron in particular), which as shown in the form of rich people was not there. showing how that data is just overwhelming. Only iron, late Yayoi, ie, as a legacy of Himiko is less controversial. future Sai Yamataikoku discuss, to avoid passing through this paper Masao Okuno, but can not. pull much excellent work is considered the average level of the current discussion concerning Yamatai. For this work, strong orders I mean, the wealth of data based on the "reasoning" is part of. Masao Okuno, Himiko's tomb remains to consider the issue of plain mirror "assume", while, the earth excavated from the distribution of iron in the late Yayoi, Tosu around until the position Yamatai Tikuzen southern Asakura He is looking for. Enough is now just want a little explanation. Considering as normal, the tomb of Himiko, not Ito countries, was considered to be the Yamatai. In any case, issues Yamataikoku, Yorokobitai the birth of new stars. Keren sentence because there is no taste, rather than aiming for the cheers of the large, the introduction of the masterpieces Aitsugu is to continue to conquer the problem 論壇 Yamatai. We hope his future. "  
(Note 7) "We the early prehistory of the Yamato government, I stand by the hypothesis that described in the literature Yamatai China, have presented an outlook of our age, even Mari Aya Suppose the hypothesis is , and consider issues raised as a prehistoric Yayoi Kinai Yamato regime has developed in this paper so far, there is no place in any way. If you assume that there is Yamataikoku Kitakyushu, Prehistory of Japan's national government established for the early Yamato Many of the traditional written history is written is devoted to Yamataikoku, consider writing Aratamerubeki the inevitable process of history from the early Yayoi Yamato Kinai regime. If you can it is Japan's first Yamatai we'll have to fall as a reference to the position of the national form of If you can think about now. Recently, some theories are taken up and even the ghost moving the capital east of the myth Yamatai Omoeru Jinmu Tadashi Azuma, precede the appearance of burial mounds Kinai fifth stage style, which infer that the forces moving the capital east Kitakyushu To take archaeological barrel can not be observed at all "(" Regional development and Yayoi culture - Kinki - "[Japanese Archaeology 1966] 河出書房新社 of the Yayoi period Ⅲ)  
  
"Said Okuno, the number of iron Kyuusyuu No Kinai Yayoi (0 vs. 24 swords, 2 swords vs 40) and as an argument to demonstrate the overwhelming dominance of Kyushu, and a comparison may indeed convince or looks. However, the German archaeologist Hans-as pointed out by Eggers, Iron Bronze metal recovered as broken or no longer needed, it usually changes its appearance of a new product. 副葬 or is the tomb, such as deliberately buried dotaku will keep the figure that only in special cases. 副葬 Kitakyushu and customs were so Yayoi period, and the Kinki area was not leaving now than in the number of iron also, the comparison was not the Yayoi period. (date [September 06, 1980 Evening Asahi Shimbun) "  
  
What absorbing. Says that recovery of metal or, in short, which do not actually exist, but trying to 言Ikurumeyou sophistry as there - I felt so.  
Mr. Sahara, however, more "He does not consider that many of the Iron Age burial Kitakyuusyuu the region," and goes on. Iron in the Kinki region, but had since had the habit of valuables 副葬 tomb, they still do not - they say.  
Nonetheless, in practice there was no 副葬 Kinki region, or what might not Nationals and Iikurumeru sophistry. Kinki iron swords and even a mirror balls, tubes, and the graves were 副葬 bracelet, but was still less is there.  
Yayoi bronze mirror of ② discussion (Table 2), the Han mirror surface 数Eagemashita 83, I had to write a sword and iron mirror 副葬 cases of two tombs in Hyogo prefecture in it. At the time, Mound No. 52 Saijo Kakogawa, Hyogo Prefecture had been talked about already (Aya Kiyou flowers line the inscription grandson Osamu Nobuko, iron swords), Ibo (warts), river (kawa) Mountains 養久 of the city (you and quickly) Tomb Yayoi (four animals mirror, iron swords), and so on. Does not know this remains a famous archaeologist. The previous discovery of more cases in the city of Amagasaki 田能 (the or) 木棺墓 remains in, or not there were cases wore bracelets made of beads made of jasper and white copper over one hundred and six. Lies in a major newspaper to write the famous scholars. Readers, to me, so I do not know that and amateurish, with heavy and the name of foreign scholars. I caught while deep distrust, "from the Iron Age village unearthed several tombs in Kyushu" (Okuno Masao's] [Trip Yamatai birds) to make, and that there are more grave goods excavated from the Iron Age village in Kyushu raised, and he was trying to refute the Sahara.  
However, Mr. Sahara Makoto, "The Iron Age in the Kinki less, because iron is rotten," I begin to hope. Comparison of rot iron should stop, I try to compare a bronze in the amount of rot. Thereafter, and daggers were excavated exceeds the total national dotaku Izumo, and even old fashioned and out of the mold dotaku Saga, Kyushu, Mr. Sahara is going to Izumo dotaku armed with Kyushu and the Kinki Dotaku craftsmen mold it made a claim for the theory of the craftsman movement. This means speaking of Oh, the beginning of endless controversy.  
  
Yamatai five mirror - solve the mystery of 三角縁神獣鏡 -  
Form and ancestral lineage ⅰ  
August 1980, "Research 三角縁神獣鏡 - the theory of ancestral lineage and form -" received an award for local history research papers 新人物往来社 sixth of the mirror. 1981 Based on the data of the mirror the next day and this iron is here] [Yamatai ③ (Mainitishinbunsya) [Mirror Yamatai - 三角縁神獣鏡 puzzler -] ④ (new people coming and going Inc.) for the two books published.  
④ The contents of the book, through the study of 三角縁神獣鏡 form, pattern of this mirror design, created a diagram that shows the origin and evolution of morphology. This is already the second section (Figure 2, Figure 6) is explained in pattern design - China Mochiita in this diagram, a pattern of non-Chinese design, the concepts that I made.  
三角縁神獣鏡 the mirrors, the Chinese model (top) and design patterns are taken from various Chinese mirror Mochii (design) is. Zodiac case and is it better 規矩 crest crest crest of serrated Sumi Yukari three main zones within the district Tadashi Yukari stereotyped image. Meanwhile, China is the mirror patterns in various design not (design) is. I do not have to say that non-Chinese design and pattern, and a small suckler crest zone district outside their Kasamatsu 鈕孔 rectangular shaped pattern. The animal species Shikigami way mirror image accompanied crest Han Three Kingdoms period within the district after 三角縁神獣鏡 model (Figure 1 - Mirror ①) is 12 ~ 3cm in diameter and is relatively small . Tashi This mirrors Kogane mound in Izumi Ward captured the mirror Oosaka ⑦ ① (Shikigami Veterinary way mirror image accompanied Tadashi Yukari Crest Middle Ming Jing's first three years), the reclamation work twice as large diameter mirror has been. As a design that mirrors the way the Chinese animal Shikigami, against No 12 ~ 3cm diameter is small, and the District 三角縁同向式神獣鏡 design incorporates a mirror nearly twice the diameter of China are becoming larger. - Would be a non-Chinese design that is even larger.  
(Please try again Figure 6). The middle mirror, the inscription Torikonda ⑧ tomb shrine in Shimane Kambara three main crest of the first district in the mirror and landscape mounds ⑦ Kogane Oosaka Izumi, while Ryou Kiyou Fetch the edge of the system triangular mirror image ④ ⑤ China's top panel,鈕孔 incorporates a rectangular non-Chinese pattern design. Three-sided mirror mirror ⑰ Kyouto Tsubai 大塚山 Burial Burial Burial Kanizawa Gunma mirror ⑯ Zhou Yamaguti ⑮ The bottom of the house, ⑧ Fetch the middle - while the main crest in the district outside edge of the mirror triangle tomb shrine Kambara District, a non- pattern has been incorporated into the design of rectangular shape patterns 鈕孔 Kasamatsu Chinese.  
Type the name of a pattern common in genealogy Mochiiru Kasamatsu This term was named in his paper Mr. Kobayashi Yukio, after I finished writing the first discussion ③ Before you post, Kobayashi to call, so using the names and 噛Mi合Wanaku another debate, whether the teacher mirrors patterns of expression (ZT) and wished we'd used the phrase Kasamatsu shape and pattern. I refused and head, while the phone was tense. Beside, the deceased wife was listening to my phone, after "I had a voice Furuwashi you" and remember that. However, the teacher "is a good" to say, after a pause, "Please send the book comes out," was said.  
  
Major paintings of Goguryeo tomb mound No. 3 Yasushi Takeshi 3  
The sides are painted with decorative samurai ritual of the Lord seems to sections in the grave side. Kasamatsu and the statue became a model form of this composition is a mirror.  
  
  
Excavated from the tomb 大塚山 三角縁神獣鏡 Kyoto Tsubai 4  
  
Kasamatsu form the lower left of the dedicated people have standing ①  
② Kasamatsu form on the right has a statue dedicated to a person  
Kasamatsu form four results arranged between the Divine Beast  
  
Goguryeo tomb murals and iconography No. 3 Yasushi Takeshi form ⅱ Kasamatsu  
I began age eighty, [Three Kingdoms] - "written Wei", "Article 倭人" bronze mirrors and iron sword head ring oxygen via China and Korea to northern Kyushu Yayoi article or journey (mirror formula after the Han) Archaeology intensive Based on 学的 fact, the theory has been argued Kyuusyuu Yamatai (Note 1 section).  
J. Wei 倭人 to transfer to Queen Himiko Yamatai from Emperor Ming of Wei, "a hundred bronze mirrors" is stated to have granted the. The archeological community four to five centuries generations grave (mound) 三角縁神獣鏡 excavated a large amount of "a hundred bronze mirrors" It was tight Takashi Kiyou spent on mainstream theory, since the beginning eighties The author's claims based on Mori Hirokazu would not be excavated from China, one side mirrors the "hundred bronze mirrors," and mirrors the expression in the Han Dynasty unearthed in northern Kyushu many cases, the Kofun era 三角縁神獣鏡 (4 five centuries) has raised the theory that domestic mirror (Note 2).  
The basis of its own domestic and 三角縁神獣鏡 I, Kasamatsu form shape design on the back of the mirror was cast out (Figure 4), the mirror can not see there unearthed in China. The authors also 三角縁神獣鏡 (mirror Workers cast) even considering the age and origin of production, the Koguryo tombs No. 3 Yasushi Takeshi design of the shape and form of idol Kasamatsu (357 in winter Shou tomb) of the main tomb mural (Figure 3) is very similar to that was a very suggestive fact. The inscription was Kaesa 三角縁神獣鏡 tread also has a plus change in China's own statements to the original terms of the mirror inscription, there was evidence that the continent who brought literacy to the author. Mound No. 3 Yasushi Takeshi mural is unique and decorated decoration ceremony devoted to the side of the main section and grave 幢 Ohata, mainly Chinese dynasties and subsumption book sealed tomb (Federal Satsu) relationship with the fourth century shows that the mid-Liaodong Koguryo ruling regime.  
Striated band mirror image expression of Veterinary way God said, has been excavated from the tomb No. 3, Tadashi Kashiwa 里 Wave music, but moved to Wa Workers Wave band who make music mirrors the county system, within the 三角縁神獣鏡seen as a prototype designed plot.  
The Wa had maintained a relationship sealed book with Chinese dynasties through the generations Takashi Susumu, the overthrow of the County who band (in 314) before and after, there is a possibility that people move engineering to make the mirror Tsutae Ryuu thought Shinsen system Goguryeo together with the hypothesis that the creation of Tatemashita shaped design and Kasamatsu 三角縁神獣鏡 idol.  
  
Note 1; Okuno Masao [1981] is here Mainitishinbunsya Yamatai  
Note 2; Okuno Masao [Yamatai Mirror - 三角縁神獣鏡 puzzler - 新人物往来社 1982]  
  
Outcome of the controversy ⅲ  
Eighties, as a refutation of the theory Kobayashi, Koichi raised by 三角縁神獣鏡 ① ② 鈕 taken any aspect of the forest from China (Chi Yuu) hole is flat (rectangular), the core during casting (a car ) lacked practicality is blocked, only 副葬 "明器 (Meiki)" is characteristic of his reclamation 鈕孔 公孫 ③ Korean Peninsula (Yan) found the area - a matter under discussion (Note 8) is The complainant was a groundbreaking study that indicate a new review 三角縁神獣鏡 Japanese view mirror of old age before the war puppet (Note 9) the momentum will accept it adheres to the Kyoto School Archaeology did not. "But this 一石 invested in the forest, Matsumoto Seicho first to Table (Echo), and the controversy and opposition researchers, and then they Huruta Takehiko Okuno Masao Then, wash the shores of the archeological community Tyuugoku soon, finally an international The waves would come on an (Okamoto Keniti Yamatai controversy] [選書Mechie Kodansha, 1995), "it is not.  
  
King of the archeological community paper, China (Note 10) is from 1981 to 1988] [Archaeology (Archaeological Institute of journals edited by Chinese Academy of Social Sciences) published serially, and was introduced to Japan has been translated. ① paper king is intended to ratify ② by theory and my theory Mori said after that, Mr. King is to attend the lecture and symposium in Japan, energetic, and argues that the theory introduction Workers Wu be.  
Against this, the Japanese archeological community, who believe in the theory of Tanaka Migaku Kobayashi (Nara Institute for Cultural Properties Agency for Cultural Affairs investigator sites), out of city (in one) Mr. Hiroshi (Professor, Osaka University) et al on behalf of Japanese archeological community Special 三角縁神獣鏡 theory by those who cast (Tanaka Migaku 倭人] [History of Japanese rioting in Shueisha 2,1991) will be claimed. From the fact that you have no one side against China 三角縁神獣鏡, because the mirror was cast specifically for Ni Himiko granted, they come out in China, and argue that. Evidence of the special cast? Ask and You, "and it is you have no specific evidence of a piece cast in China," it is the answer.  
Archaeological theory and academia fallen into a cycle of "casting special mirror" theory was not supported from the shadows, including 80 fact, and his colleagues have unearthed burial mounds and Mabuti Hisao 三角縁神獣鏡 Tokyo National Cultural Properties Research Institute The paper analyzes the various isotopes of lead and bronze mirrors Han formula (Note 11) was not what I'm sure.  
  
Appendix Figure 5-1 Mabuchi paper  
  
  
Mabuchi paper, the Mirror and 三角縁神獣鏡 Kunizou Kiyou Han tombs excavated has concluded that it is all made in China. But, opaque paper Kono Mabuti mirrors, Takashi Susumu has been unearthed from China in fact is not also analyzes one aspect, the lead isotope ratios in mining as a key ingredient to most estimates the origin even in Japan are you out of the state mines and analyzed for the Kamioka mine. How the hands of such an analysis, the average person without such knowledge, scientific analysis, "made in China are still 三角縁神獣鏡 mirror", the "come out from China because after all special castings" The only conclusion that not only twenty years after Juan Yamatai little, I believed I had not even archeological community and researchers in other fields.  
  
1986, No. 15 Mine Hiroshi from mound city of Kyoto Hukutiyama "in the first four scenes," with a triangular rim board Ryou Kiyou excavated inscription. The first three years late morning Jing Wei, is the first year of Akira Hazime era. "In the first four scenes" are not in the era in Chinese history. To meet the Niyusu, the horse dragon Nishinomiya, Hyogo Prefecture (horse passage) is Museum Archaeology, "in four first-view" Ryou Kiyou board edge triangle inscribed (excavated tomb Mochida County Tsutae Miyazaki) today announced that a . Than ten years ago, to write a book ② ② and discussion, I sent a letter to the dragon horse museum "tour of the border triangle board Ryou Kiyou Jing Ming's first four years," Have you ask. M from the Director at that time "that is not in the hotel mirror," got the answer that I will never forget that heartless.  
What a mirror out why the Japanese era tomb does not exist.三 角縁神獣鏡 mirror theory "custom," he was taking the city out of this "in the first four scenes," Taishi in the mirror inscription, "Theory New Year" for showing off a Ru説. The following year, I have decided that Ni Yamataikoku granted, they put the year as New Year the following year, he was purported to write such a newspaper. Juan lip service to what the theory Yamatai Kinki. But what archaeologists say this doctrine. Mr. 王仲殊 China, Taishi doctrine adhered to the theory of special cast prewar Japanese archeological community, and is not considered an academic editorial "monstrous doctrine" that has harsh criticism.  
I said, "In the first four scenes," the mirror, knowing that the product is a distant era of the capital, Wei 論Jimashita fixtures give an example excavated 紀年 Wave music. (Note 12).  
Special cast my mirror criticism, critical theory from the soon Kobayashi, moved to the criticisms went constitution of Japanese archeological community health. The debate mirrors an international producer of Chinese scholars took part in the archaeological fact that 三角縁神獣鏡 not allowed even to go out 三角縁神獣鏡 the Chinese "custom-made theory" and together, a learning Will. I, then, ethnocentrism that undercurrent of Japanese academic community and also on archaeological issues paleolithic fabrications (The Mu Torizu not No yeah) eyes now turn to criticism. In his theory of learning I Kobayashi, I know what the 三角縁神獣鏡 a mirror, be aware of the existence of non-Chinese pattern of 三角縁神獣鏡 design, the theory is built domestically. No pre-war puppet "mirror casting special" theory, self-centric people to academic archaeologists claim to foreign countries, the international community in the 21st century is not acceptable constitution Association. In 1989, Kobayashi has passed away, his life, so I think he was too warm eyes towards his theory to criticize me. (Note 13)  
Two decades, much repeated, repetition of moves like "casting special mirror controversy" breaks the cycle of 2001, it appeared like a thunderclap fine, and Mr. Arai Hiroshi 三角縁神獣鏡 metallurgist Lead isotope analysis of the paper (Note 14) is. This paper, north and south of China, the basic data to estimate the origin of the mirror region, North Korea, in an exhaustive analysis of lead isotope ratios in lead mines in Japan, 三角縁神獣鏡 also unearthed Han tomb is the mirror formula Of course, an exhaustive analysis of paper was the lead isotope ratios that mirror real Takashi Susumu unearthed in China. According to the paper Arai, Susumu Kiyou true Kiyou Takashi excavated from China, China, belong to the area of lead isotope ratios in China's mine all lead to 三角縁神獣鏡 the lead is precipitated mainly in the Kamioka mine he says.  
  
Appendix Figure 5-2 Paper Arai Hiroshi  
  
  
Note 8: Mr. Mori Hirokazu matter under discussion, "Japan's ancient culture - formation and development of cultural issues tomb" [Ancient History course in 3,1962) ① 三角縁神獣鏡 Mr. Mori is also important aspect of Chinese ② 鈕 come out (Yuu Chi) hole is flat (rectangular), the core during casting (a car) or are packed, lacks practicality, only 副葬 "明器 (Meiki)" reclamation in these ③ Mr. 公孫 鈕孔 features of the Korean Peninsula (Yan) found the area - he said.  
  
9 Note: The age of mirror view Taisyou nine years old puppet war, Tomioka Kenzou (Kyoudai teacher), but was known at the time 三角縁神獣鏡 "first year starting □" because of the missing letter inscription, in Takashi Kiyou issue can not be determined. We inscription "other Xuzhou out of copper, Rakuyou out teacher" (unearthed tomb Tyausuyama Kokubu, Osaka) covers, "Xuzhou" and "Rakuyou" identify the historical evolution of place names to the time of the simultaneous presence of place names, border triangle Takashi Kiyou argued that mirrors divine beast. (Tomioka Kenzou old mirror] [Research 1920)  
  
Note 10: King of the archeological community papers ① 王仲殊 China "三角縁神獣鏡 problems in Japan" in 1982, ⑩ "Ryou Kiyou on board the first edge of the triangle inscribed scenes excavated four years in Japan," in 1987, and 13 Hen , Inc. 王仲殊 students] [三角縁神獣鏡, 1992)  
  
Note 11: Akira Yoshi Mabuti Hisao Hirao, "Study of Chinese Mirror by lead isotope ratios in expression (two) - Focusing on the West-MUSEUM382 mirror excavated No. 1983  
Western Han mirrors in this paper, the Yayoi period Narrow bronze daggers, dotaku small? Made mirrors, 三角縁神獣鏡 has shown that the lead isotope ratios Tyuugoku mirrors excavated tombs. North China Mabuchi and his colleagues made their own, southern Japan, a four-figure lead mining area of the district and the Korean peninsula remains to illustrate the above analysis of the isotope, and the mirrors and the Yayoi period Dotaku Han • The area of northern China is a mirror made of lead, lead the South China region and the mirrors 三角縁神獣鏡 Kunizou Kiyou tombs excavated from the Han, the Korean peninsula and the region lead Dotaku Narrow bronze daggers and Early each has been shown that the orderly entered. In other words, according to the analysis of lead isotope ratios, has been shown to be a mirror made in China and 三角縁神獣鏡 Kunizou Kiyou excavated Han tombs.  
Appendix Figure 5-1 Hirao paper Mabuchi  
  
  
Note 12: Okuno Masao, "the first four years did the present landscape - a leading article in domestic Mirror -" ancient culture in East Asia [51, 1987), Han Dynasty, Han Dynasty tomb was easy waves of the Korean Peninsula in northwest , has unearthed no furniture on the written history of the era after era. (Wave Music [Second Book Han Tomb,]).  
Ryou Kiyou board domestic process, please have a look at my schematic diagram in Figure 6 the design pattern design patterns and non-Chinese Chinese domestic mirror. Chinese pattern mirror design is to form a small panel Ryou Kiyou Chinese ancestral ⑤, expanded into a mirror and ⑫ Motida Kiyou Tsutae Miyazaki Burial No. 15 Mine Hiroshi ⑪, ② 鈕孔 of design patterns at the non-Chinese incorporating a rectangular panel Ryou Kiyou stir zone incorporating a mirror 大塚山 ⑲ Kyouto Tsubai ① form of design patterns Kasamatsu even more non-Chinese (24.5cm) and we are trying to become larger.  
  
Note 13: Anazawa Kazumitsu "Miracle of Dr. Kobayashi Yukio," "sometimes 馬目 Kobayashi (or Nome) (Hazime Sunao) unto" 三角縁神獣鏡 issues, all books and papers have criticized me Among the most commonly studied have been writing the mystery of his 三角縁神獣鏡 Okuno Masao [a]. But because he did not regret Okuno pleasure of learning to learn how genuine his belief still can not correct a horrible direction to go in a fling Aranu called "he said. "(Chapter Tsunoda Humie Archaeology [Kyoto School], 1994)  
  
Note 14: Papers Arai Hiroshi  
① "On the Origin of lead bronze estimate of lead isotope ratios" [No.] Archaeology Magazine Volume two fifty-eight (Yes Yes Yes II)  
② "Hiroshi 和屋 三角縁神獣鏡 methodology is a serious error" [Quarterly] No seventy-eight Yamatai (four hundred and fifty thousand and two)  
③ "place making from the viewpoint of the lead isotope ratios 三角縁神獣鏡" [No one] roll archaeological information (limited, five thousand and two)  
④ "Judging from 三角縁神獣鏡 Takashi Kiyou non-lead isotope ratios" [ancient culture in East Asia (six thousand and two in autumn)  
Arai Hiroshi [⑤ science from the viewpoint of "Archeology" moot point Guide (Daiwa Shobo, seven thousand and two years)  
  
Six new reading 倭人 J. Wei Transfer  
② The winning essay editor in my Yoseta Yasumoto, "order" was something like the following.  
"Masao Okuno, Himiko's tomb remains to consider the issue of plain mirror" assume ", while, the earth excavated from the distribution of iron in the late Yayoi, Tosu around the southern Asakura Tikuzen position Yamatai He is seeking to put on. Enough is now just want a little explanation. "  
① travel history, "the county who use the band come from?" (History and figures August 1983]), which says "order" is the work of responding to the early eighties.  
Yamatai door to people from the county zone, the county used an itinerary of the line who arrived in the country band at the end Roh countries and Ito, Wei ambitious "twenty thousand and one thousand miles" to the total subtracted from the itinerary of the country from the country queen Ito The gait is to deduce. Enoki is a later version of the theory of arrangements, interpreting literature against the puppet looks like frozen swan Naito argued before the war, was my first attempt.  
J. Wei, a total 里数 people from the county to country band Queen, "twenty thousand and one thousand miles" (① note references) and as President Roh 里数 until the end of the country band from the county who are subject to each interval mathematics Then, just as "Hazime Mari" will.  
From country to country 里数 Ito Roh next weekend, and Wei J. "one hundred and five in the village go by land to the southeast, the country leading to Ito" (② Note references) and you. Ito Karatsu countries and some countries - a map of the western end Roh Fukuoka (Fig. 8) Please see the.  
FIGS 8 Matsuura Karatsu western Hukuoka Itoshima  
  
  
Ito direction to the country from the country at the end Roh is "Minami Azuma go by land", but in that direction, and Karatsu Proceed southeast around, the country has 行Kezu Ito, who will go to Saga Ariake Sea coast. Roh at the end of the country (Matsuura-gun), the actual direction to the country from Ito, "Minami Azuma" instead of "East" pipeline network. Wei is the direction of the Department has shifted as much 45 degrees clockwise. For example, J. Wei country Tsushima (Tsushima (or to one)) from Kunikazu Hiroshi (Iki), the direction to "cross the sea to the village more than one thousand one to the south, and the names and 曰U 瀚海, ranging powers one" ( ③ Note references) are written. Looking at the map the location of Tsushima and Iki, but the "South", not after all "Minami Azuma," Kuni Tika, you can see that approximately 45 ° apart.  
First time 1970, Mr. Harada Hiroshi six is a splendid interpretation Kudashimashita to this shift in direction. Use County who band came to the summer cruise is that the sunrise of the summer, "the East" because it was, and the orientation and on the map and the actual article Journal of the Wei become out of approximately 45 ° (Note 8) that is. ① wrote his book in 1981 I'm [here] in Yamatai examine the envoys of the season, and crossing the Sea pirates Wa, band season has come to use the county who still thought to be the summer, Harada's preeminent followed the view orientation.  
Conclusion of the discussion is heading, people come from? Use county band, from country to country Roh end Ito, Minami Azuma orientation rather than "east" towards more advanced, it will be. J. Wei and "go by land Minami Azuma" We have to, use the county who band since you are able to ship to countries Roh end, the country Ito village one hundred and five lines with water lines east of Karatsu Bay, went straight in the boat to assume. Itoshima go to the beach from the cliffs there are many cliffs Karatsu, Yayoi era long ago, yet the coast road Piercing our own age would not have been. YTD 里数 county people Ito country band Yes ri fifty ten thousand From there, the Queen 里数 to country, according to the theory Enoki, Ito YTD from the country twenty thousand and one thousand miles total 里数Subtracting the village for 里数 1,050,001. From country to country 里数 Ito will Queen thousand five hundred ri.  
Enoki is a theory of the origin country 読法 radiation Ito formula (Enoki Kazuo Hall [1966] Aya Itaru Yamatai), in pre-war Hikitsui swan theory, theory is theory became the main thrust of postwar Yamatai Kyuusyuu. I followed the theory Enoki, there is another reason these days, the chairman Mr. Enoki, Mr. Secretary-General was Yasumoto, "National Association Yamatai" Kura Retsu, but I have been Seeking counsel was undertaken. At that time I was still late education] in [Three Kingdoms finally started to read the original text, until it is translated Ishihara Hiromiti Guide] [buzz Wa Wei Journal (Penguin Classics) by translations, had a cup of tea Nigoshi It is.  
  
Now at that time, the debate Yamataikoku the Yamatai was Huruta Takehiko [(1971) Art Department Yasumoto from ["邪馬壱国" did not (1980) and drawn into, violent confrontation between the theory front Kyuusyuu was out. Kinai theory, the theory of Naito Konan since the Meiji era (Note 9) Takashi Kiyou of 三角縁神獣鏡 flown theory, and largely with the blessing of the Department of Archaeology and Satoru Humi, a confrontation between the theory of someone else's problem Kyuusyuu I felt like looking.  
I have eighties, the country origin Ito radiation formula "land guy, not the country Yayoi, horse country investment, leading to each of the Yamatai" Enoki has been named according to the theory, reality, by itself yet, "South Yamataikoku Solstice, at Department of the Queen City, the line ten days the water go by land in January, "the state was not getting the correct answers.  
Kyushu 白鳥庫吉 theory, "in January go by land" to "day" to correct, not Enoki Kazuo, "the tenth day you can line the water if you go by land in January," construed, by subtracting the distance of 里数 " 1500 Village "gate theory Tikugo of distance and direction as Seicho Matsumoto is incorrect, the theory was to avoid 比定 Kyuusyuu position," 以死 "Himiko murder theory, the" large percentage "of Wei sent a and Director (Tiyou Kiyoshi] [Humi Tooru) Ukemashita greatly from the revelation.  
[Three Kingdoms] and "Wei J." instead of the target, pull the dictionary mill, and try to put inside my own translation, written notice of the beginning of this section first, country and Queen and Country Ito There was an article titled North and South locations.  
  
① travel history, "the county who use the band come from?", According to the positional relationship between the two Koreas that there is a country south of the country on the Queen Ito, three from the cloud around the tomb of King Itoshima Ito, calculated by the theory, Enoki, "five thousand one hundred village "to the south line, a range Yamataikoku 比定 the Ariakekai northern coastal area, and I will Chikugo Kishi Kita area. (7, 8). North-South direction and tie the country queendom Ito, however, according to Harada theory mentioned above, it is necessary to correct the East at 45 degrees.  
The percentage of officers dispatched Wei said before, "Ito ruled the country, states that the prosecution" of the article, "The King Has our world, and everybody (all) unified the country belongs to the Queen. To use the gun, coming and going , parking is always (stay) where Ru "(⑤ Notes Resources), along with Ito that the prehistory of the King, Uke a warning from the metaphor of the queen Tiyou Masa Wei Wa," Death by Himiko "after eight years of Akira Hazime Keyword to read the political situation.  
"Himiko has taken responsibility for the political instability, was killed," a claim Seicho Matsumoto ("Humi Tooru Tiyou Kiyoshi") as a clue, I  
Reread the textual transmission 倭人 J. Wei, J. Wei, from among the "以死" Looking for examples of all of the death of Himiko thought. (Note 10). I think that the county officers who were killed in the zone Himiko, but there was no response Amariri half a century, 2005 (2005) in March, a new view of Kenichi Okamoto (Note 11), "Wa Last Queen Himiko - "Death following" reconsideration "was announced, has been shown to be sympathetic with my theory and strong Seicho Matsumoto. Mr. Okamoto, see the trees and Husou Penglaishan] (思文閣出版, 2008) even in the last sacral Himiko boost, we have examples such as the research of all the 以死.  
  
Note 8 Text: Harada Hiroshi six Yamatai controversy] [1969, page 358) "where the sun is out, between the winter solstice and summer solstice, but understand that it is different from about 60 degrees. Belt use during the winter if the county who came up, you get the direction East and the sun is actually east of the northeast.'s south southeast. Yattekitara near the summer solstice, the east and southeast, the southwest is the South. In summary the summer solstice and winter solstice Direction is also a difference of 90 degrees. Yuya non-national differences between the evil dog from South Korea, that the error occurs in the south than about 45 degrees outside and practice, the band has come and how to use county a summer, what it took to record attendance, since the orientation toward the sun out, that it might be considered a difference of 45 degrees out there. "  
  
9 direction of the sun of the summer solstice  
(Harada Hiroshi six [more] controversy Yamatai thirteen Shobo)  
  
  
(Note 9 text) theory of Naito Konan: ("think Himiko" [] 芸文 first to second year iv, 1910) In this paper the Naito Konan "in January and say ten days go by land from the land of horse-throw line Wed distances, "written with that number," King of Yamato Kinki "interpreted as a journey to the horse and throw the country of origin. Wei ambitions "Minami Itaru 邪馬壱国, Queen City Department office, the line ten days Wed, January go by land" phrase. Hunan original "South" does not give a direction that the "East" seems to have interpreted. Naito Konan's theory since the Meiji era, the countries bearing the Queen "South" from the "east" would be amended to pioneering.  
  
Note: ① literature "over two thousand village self-Man District queendom Solstice"  
② Note: We "go by land one hundred and five village southeast Arrivals Ito country"  
We note ③ "over one thousand sea 一 Minami Wataru Sato Moreover, sea 曰瀚 name, Itaru Hazime 大国"  
We note ④ "north of the Queen own country, especially placed Hiroshi Hazime rate, the prosecution states, countries 憚之 awe, Osamu Hisashi Ito country."  
We note ⑤ "Tamotsu Ou world, all statistical attributes queendom, Ambassador Hisashi Tokoro-gun exchanges use"  
  
(Note 10 body) Okuno Masao: "Metaphor warning", "以死", "more than one hundred steps" - Interpretation of Article Akira Hazime eight years - (April issue [1981] Yamatai Quarterly No. 8)  
(Note 11) new views of Kenichi Okamoto: "end of Queen Himiko of Wa -" Death following "reconsideration", [trees] Husou Penglaishan 思文閣出版 (August 2008)  
  
Seven, ten days in January go by land line "water origin  
I said, "ten days in January go by land line" water-gun that was the origin of the band who, ⑤ Yamatai conquered his book Ancient Yamato (1990 JICC year of publication) is from.  
  
J. Wei, the first "counties (those counties zone) to reach more Wa" to preface with fellow country not a country 支国 Ito country Lushan National Tsushima from Korea at the end of the first sentence of the evil dog water lines go by land travel throughout the country Yuya countries, orientation, are indicated in 里数.  
Horse country and investment in the next sentence "where the capital of the Queen Yamatai" process leading to the water go by land lines, are indicated in days.  
Country after the next twelve の incidentally, "he dog in the south country," and all the way back to the end of "counties (those counties band) to lead the country than the Queen" and noted "two thousand余里Nari "has written a total of 里数.  
It should be noted here is the beginning and end of days and travel articles 里数 "counties (those counties band) to reach more Wa" and noted that the starting point is that starting point.  
Journal Article Wei journey, as seen from the example above, the process can be described in a process described in 里数 days, I noted that the process leading to the country band Queen, both the starting point for those counties. In other words "counties (those counties band) to reach more Wa," if you write in 里数 "over twelve thousand village", if that milestone in days Show "in January ten days go by land line" Water is being written and It is.  
Travel stories, even to 里数, even if the number of days, we've written in between the numbers arriving from the border district departure, you can create a formula.  
In such a formula, and will consider the process of theory theory Kinki, Kyushu, Kinki theory formula is 里数 + days shows that the theory-laden interpretation of non-contradiction holds a 里数. I (theory Kyushu) formula is a village more than the sum of twelve thousand 里数 countries through the interval before the Queen from the country districts. Days are added to 里数 can not, the number of days required for the milestone to the country to Queen County (January ten days go by land-line water) is the.  
When I consider the theory of Kinki, the total distance spans the country from non-county Yuya, ranging from country to country queen horse throw the Kinki region (January ten days go by land-line water) plus the total number of days that " over twelve thousand ri "It's a figure that is the theory of interpretation. , Such as the concept of distance is equal to the sum of days and 里数 里数, is whether the sentence was described as the author of the Journal of Chen Shou Wei played. Is to consider how close to the Chinese view of the time or distance of formulas of the theory and the theory Kinki Kyuusyuu short.  
Moreover, as pointed out earlier, the textual description Wei J., "counties (those counties band) to reach more Wa," if you write in 里数 "ri over twelve thousand," the milestone (counties - Women border between the Kingdom) in days, if Show "in January ten days go by land line" Water is required to verify that the Re-writing neatly and accurately.  
Whether the correct reading of these travel articles, examines the case of J. Wei again, I think it is important to reaffirm. I was 20 years ago, the book written in 1981 (Note 1), which has examined the relationship in the case of Wei Journal 里数 days and it seems not yet been approved. Wei in the journal, but I have quite a few example sentences describing what it takes to travel from the Sun shows 里数 journey, and unfortunately (Note 2).  
In recent years, archaeologists have been discussed in academic circles, "he country dog" theory as the Tokai region, ignoring the state of literature in the debate just Yamatai cover your eyes. Even things that are going to follow the academic literature historians ignore archaeological literature. We also 見Ataranai a historian J. Wei examine the pros and cons in the case of theory of the two formulas are these days today.  
  
Okuno, Section 1 [Footnote 224] is here Mainitishinbunsya Yamatai 1981 - 225 pages.  
Note 2 Section "Wei book" Jurassic third Ming emperor. [Three Kingdoms] (a) 110 111 P. Hong, the publisher said.  
  
(Figure) to travel 10 Yamatai  
  
Note 10 Text: [Yamatai conquered Okuno Masao Yamato Minami Itaru 耶馬 Ancient land units, ten days in January go by land line "Water is a thousand miles it takes to go by land line and Wed between twenty thousand and one more country bands from the county queen the number of days - this interpretation said that already in 1971 [Huruta Takehiko "Yamatai" did not] (Asahi Shimbun) is pleased to announce that on. However, the theory Furuta, Tsushima and Iki taken in January and go by land in the Korean peninsula, and much - my interpretation is different.  
J. Wei 倭人 transfer is indicated by the interval between countries 里数.  
The country spans from Yuya Yamatai not, if the "ten days in January go by land line" water, then it 撰者 Chen Shou's [Three Kingdoms], both written and days mixed with 里数 each interval, a total of that will be shown on a Ri 里数 over twelve thousand. In theory Kinki Yamatai "ten days in January go by land line" water and the road to see writers from northern Kyushu to Yamato, but at least Chen Shou (in straight leg) that the assumption that the mix and number of days 里数be. However, the [Three Kingdoms "written Wei," quoting the article two years the first scenes of the Third Era Emperor Ming [Susumu Osamu] and [Kanade Minister name Wei at this in a war council to avenge the abyss 公孫 of Liaodong, village to Liaodong from Rakuyou numbers, "over four thousand village" and the number of days needed to go this "hundred days" to this. The [post] to transfer 漢書 barbarian, Nitinan from Jingzhou (Vietnam) until "more than nine thousand 里Nari. 到Ru hundred days to the three" cases are written. Noted in the itinerary after 長途 里数, the number of days required to mark the journey continues, or they would not write and understand sentences are best.  
How to write these itineraries Tyuugoku historiography "J. Wei Wa hearsay" and Atehameru, the "self-gun queendom Solstice, Wed January go by land line south ten days," a statement that the people from the county to country band Queen, "twenty thousand and one余里 "it takes days and representation of the itinerary. Similarly, "water line in Article Rui Itaru horse country south of investment to" a statement that also can read and representation of the number of days people from the county line band Wed. The projected position of horse country, "Wed south line twenty days," Annals of days that 比定 would not be alone. You will be rewarded a candidate dare Wed row of twenty days, ten days before the country is spending the end of Lushan, the rest is ten days. Onga River Basin and Kyushu, and can be 比定 the Usa in the east of Kyushu or Buzen. (Okuno Masao Yamato [Ancient Yamatai conquered in 1990 JICC publication). (Conclusion)